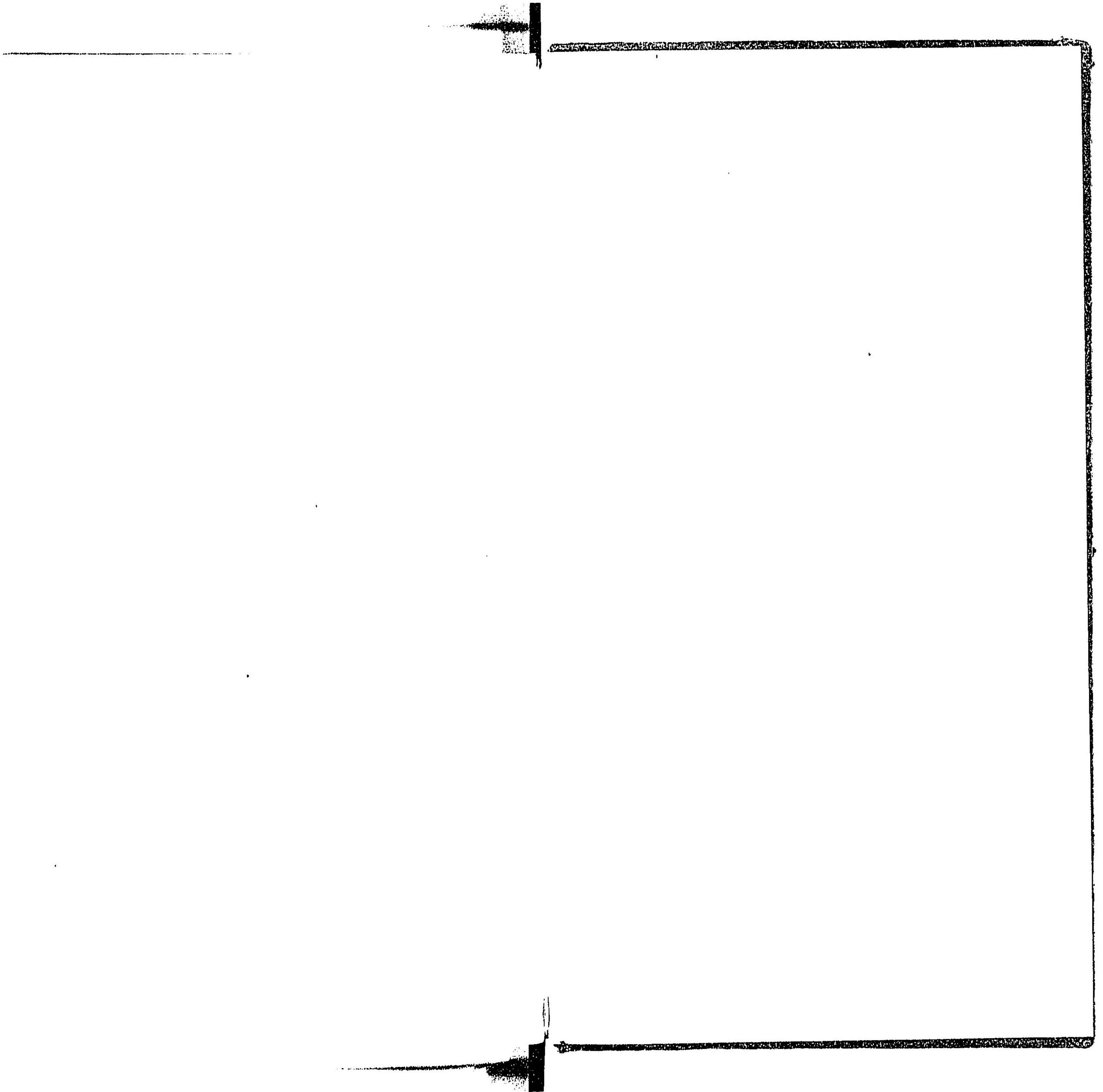


914.5  
I619m2  
S

都立てふり  
附 檢 査 細 語  
考 證

六 倉 書 店











文學博士関根正直先生著

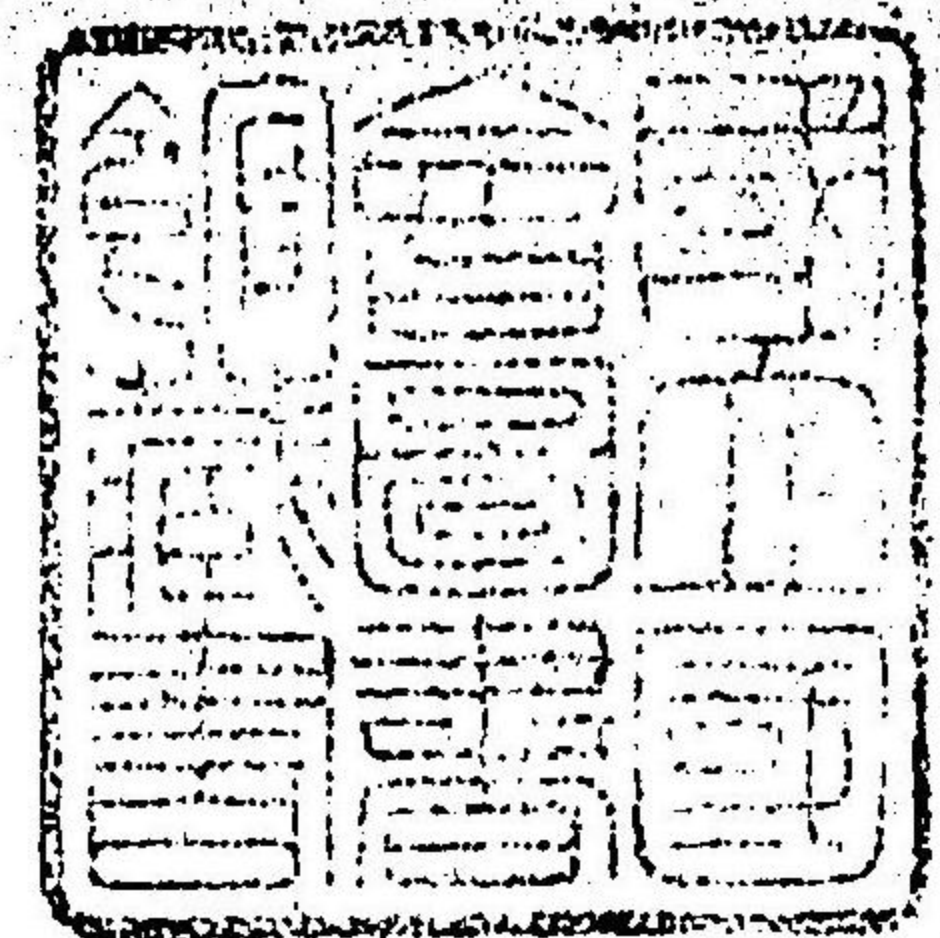
都下てふり考證

附梅ヶ枝物語

東京 大倉書店發行



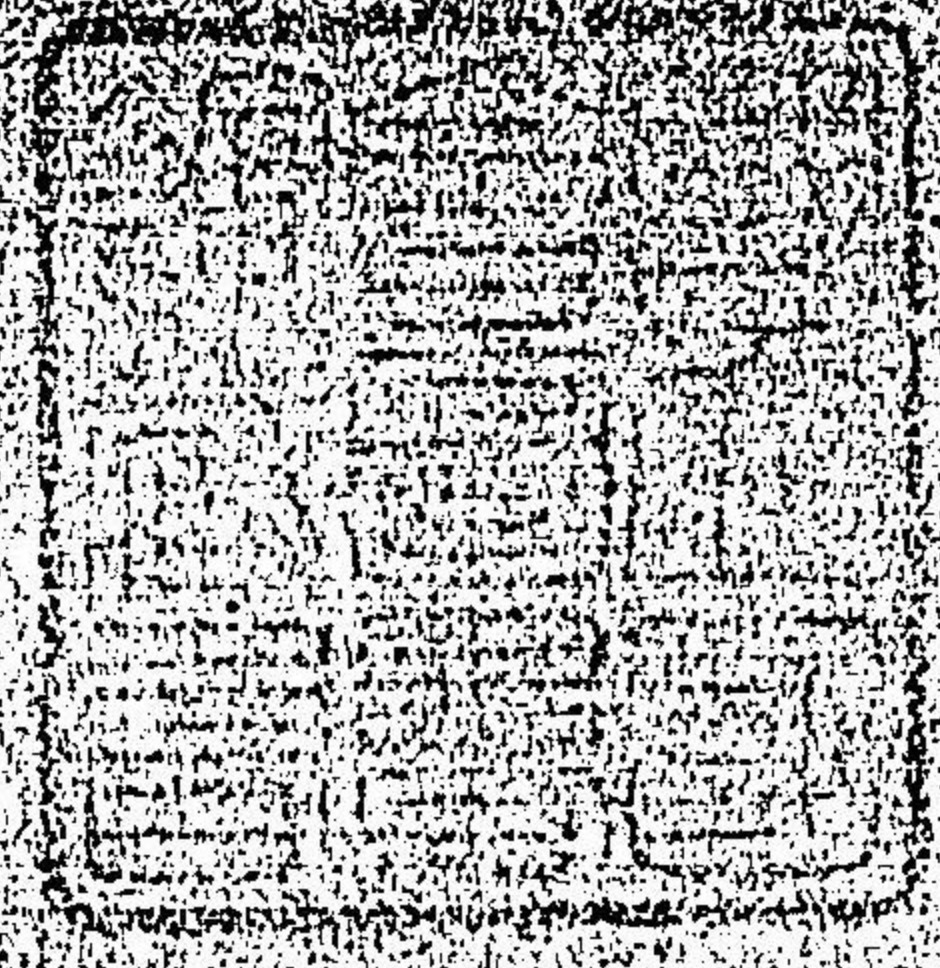
914.5  
1619m2  
S



337314



1145  
1619/2  
S



337314



石川雅望翁肖像

備前正宗氏藏



## 緒言

此の都のてふりといふ書は、江戸の人六樹園主人石川雅望マサノブといふ和文の名匠が、寛政の頃の、江戸市中の雑鬧な風俗を、優美な和文體、古雅な詞で綴つた面白い本であるが、あまり好文家に讀まれぬから、之を世に出して、和文の趣味を知らせたく思ふに就いて、一言申し添へる。

契沖阿闍梨賀茂眞淵大人が出られて以來、國文學にも古文辭の研究段々進んで、所謂和文即ち擬古文を能くする人々も多くなつたが、其の中で村田春海藤井高尚の二翁を、其の頃の能文家と世間では稱してゐる。其の間に立つて六樹園雅望翁も彼の二人に劣らぬ和文の達者であると思はれる。然し雅望翁は賀茂本居の系統に屬せず、今の詞でいふ學閥の人でない、學歷もない一の狂歌師で



あつた故に、固くるしい國學者連からは一向に推重されず、やはり宿屋飯盛といふ號の方が世に聞えてゐて、久しく唯狂歌師とばかり思はれてゐた。

此の翁は江戸小傳馬町三丁目の旅亭糠屋七兵衛の子で、壯年家を嗣いで自身も七兵衛と名のり、又、五郎兵衛と改めた。漢學は古屋昔陽に、和學は津輕侯の用達町人津村三郎兵衛號滄菴といふ人に就いたのみで、大方獨學自修の結果、和漢の學に造詣深かつた事は、其の著述を見て知れる。所が壯年の時から逆境に立つた人である。と云ふのは、寛政の諸政事向改革の時、翁の家も馬喰町の公事宿（地方の農家を煽動し地境論などの訴訟を起さしめ勘定奉行の裁決を得るまで己が旅亭に宿泊せしめ置き旅籠賃を食る宿屋を云）と同様に時の政府から認められ、辯解も嘆願も採用されず、壓制的に江戸構を命せられて、一時舊知と交際も絶え、内藤新宿にわび住居して、讀書にのみ耽つた。其れがために却

つて學者には成つたが、世人からは尊重されやうがない。其の上當時士農工商の階級制度を重んじた時代で、何でも二本差でなければ人が敬まぬ。又漢學をするなら林家（大學頭）の門人、和學なら賀茂の流れを汲まないでは巾がきかない。當時賀茂の流派の先輩で、加藤千蔭は幕府の吟味與力を勤めて、江戸市民に對しては飛ぶ鳥をも落とす勢ひを持つて居た。尤も寛政の改革には不首尾で、滅祿を命せられたが、猶前の墮力で人氣は落ちない。次に村田春海は市井の出であるが、富豪のなれの果、後年桑名侯（松平樂翁）などに聘せられ、其の扶持をも貰つて、眞淵の直弟子であつた。較同輩とも見るべき清水濱臣は、醫者なれば長袖の身分。高田與清は多磨郡の郷士で、後には三沼連漕方となり、隠居してから三緑山倭學士などの肩書を振りまはして、随分威張つたものだといふ。然る所先輩千蔭は勿論、春海と雖も、翁の學識文章は聊かも劣る所がない。ま



して濱臣は、歌文は出来るが學問は狭い。與清は博覽なれども歌文は不得手であつた。而して其の名聲はといへば、皆隆々たる大家先生で、迎も宿屋上りの石川五郎兵衛が、膝組では話しが出来ぬ。(曾て雅望が千蔭の萬葉集略解に助言をした手紙の名宛に「八丁堀様 石川五郎兵衛」として、加藤様ども千蔭様ども姓名を書かない。又濱臣に對しても卑下謙退してゐた様子は、清石問答のかきぶりでも分る)

斯様な事情から不平が積もつて、一生涯狂歌師で終つたすね者であつたらしい。随つて其の狂歌も元落首體より出たもの故、飽くまで滑稽によむべしとの主張で、野卑俗調をよしとし、わざと本歌に遠ざかるやうにした。是れも憤る所あつての事で、一つには常に翁と拮抗した同じ狂歌師の四方眞顔が、狂歌は古の俳諧歌なれば、上品によむべしと唱へ、歌人和學者の方へ近づいて、高尚

ぶつてゐたのが、癡に墮つたからでもあらう。當時千蔭春海の同輩や門人で、歌の先生大人と謂はれた人も餘程あつたが、さしたる學問もない癖に、いやに高く止まつて、翁を「あれは狂歌師だ」と見下げてゐたのを、自分に學力のためむ所ある翁は、中々以て負けてはゐぬ。いよく反抗の氣勢を高めて、遂には例の口ずさみにも、

歌よみは下手ころよけれ天地の動き出してはたまるものかは

など、歌よみ連を嘲弄するに至つたから、さらぬだに狭量なる當時の歌人和學者は、怒るまい事か。彼の眞顔は、與清や平田篤胤に頗る稱美されてゐるに引きかへ、翁は痛く嫌はれ罵られてゐる。まして二流三流の和學者歌人には、最も忌まれた事であらう。所が事實は争はれぬ。雅言集覽や源註餘滴などいふ翁の著述は、かいなでの和學者の企て及ばぬ所で、而も後學の至極重寶とする書



であるから、是だけでも今は立派な和學の大家である事は、誰れも認めてゐる。其の上和文の達者といつたら、元祿以降即ち國文學復興後、幾多の和學者中、恐らく五本の指を折つて外へは出ぬ名人だと思はれる。

チヨツトワキイチ  
一時岐路に入るが、全體和文といふと、徳川時代の和學者の手に創まつた者だとはかり、専門家以外の人は思つてゐる様だが、決して徳川期に限つた産物ではない。ツマリ平安朝時代の物語草子日記類の文が、いかにも優美である所から、鎌倉時代以後に至つても、其の趣味を喜ぶ歌人杯には摸擬せられ來つたので、徒然草杯も、いはば其の一つで、當年の事を叙述するにも、古言で古風に書いた方が、雅馴に見ゆるからである。然る所、下手の書いた文は、摸擬ばかりを勉め、又は朗詠集の詩句、古今後選等の歌の詞を引き入れるのを、唯一の修辭法と心得た様なのがあつて、讀むにもうるさく、所謂歌よみ連歌師のぬめりに陥ち

て、文に生氣なき者と成り下つたのが、室町時代から徳川期の初めである。然るに元祿の頃より、漢文に古學古文辭學を唱へる學者の出たと同じ様に、國文學にも古學古文辭學ともいふべき學風の起つたのは、不思議な機運である。扱古言の學問の進むと共に、和文を綴る技術も頗る巧妙になつた。眞淵の奈良朝の風をとらへて、崇重な文を綴るを始め、伴蒿蹊村田春海などに至つては、漢文の骨法を參取して、而も雅馴な諸體をなせるなど、凡そ文化より以後の和文は、決して一概に擬古文とはいはれない。姑く春海の琴後集にある議論文などを讀んで御覽じろ。和文でかうも條理を立てて、思ふ事を存分にいへるものかと、感服されよう。又萩原廣道の源氏評釋の總論に、源語時代の社會の狀態を盡してあるが、痒い所へ手の届くやうにかいてある。實に當時は和文發達の最頂點に昇りつめたと云つてもよい。今日は時勢も全く變つて來て、和文で著述をする



學者もなからうが、唯世間の人が、一概に和文は廻りくどいの、叙景叙情の外には適しないのと擯斥するのは、其の實、あまり讀まず書かず、其の妙味を知らぬからの事であらう。一つ古美術品を愛する心持で、讀みなれて御覽なさい。得もいはぬ趣味が涌き出ます。

閑話休題六樹園雅望翁は、當代に希な和文の名人であるが、前申した通り、狂歌師の立場から、其の書いたものが皆な滑稽諧謔で、眞面目な物がない。「吾嬬なまり」の文には、縦横の奇才を現はしてゐるが、狂文の集だから和文の例には入れまい。此の外では「都のてぶり」「蠶のすみか物語」「梅が枝物語」「北里十二時」などであるが、何れもはかなき筋の事ばかりを書いたもので、竹取伊勢源氏枕の筆法より、今昔宇治拾遺の句調まで、皆吾が藥籠中の物として、自由自在、意の如く手の下に出て来るのを、皆戲樂の方に向けたのは、全く和學者の

跡を襲ふを嫌つたからである。乃で表面だけを見る學者は、此の翁を和文の名手とも知らずにゐる。翁が後學の賞翫にあはぬを惜しい事に思つて、一つ其の和文を紹介して見ようと思ひ付いて、取出したのが「都のてぶり」である。

都のてぶりは、其の命題の示す通り、江戸市中の猥雑なる風俗を描寫したもので、富澤町の古衣市、兩國橋の見せ物、馬喰町の旅籠屋、茅場町の藥師の縁日など、微を穿ち精を盡して書いてある。凡て卑猥な市井の俗事を、上品な雅文で書いて見せるといふのが、作者の自慢であつたらう。此の後橋守部が江戸殷盛の狀を、萬葉體の長歌に綴つたのや、寺門靜軒が漢文で書いた江戸繁昌記も、此の「都のてぶり」から思ひ付いたのではあるまいか。

それから前申す通り。例の古學に造詣深い翁の事だから。其の文が又一語をも苟且にせず、一辭一句皆出典があつて、決して自分拵への熟語などはない。ろ



れを一々穿鑿するには及ばぬやうだが、記事の内容が古衣市や見せ物や旅籠屋などいふ所に、却つて物體らしい出據のある詞や、古典の成語をとつてゐるから、一層滑稽の感が深くてをかしい。是れが又能く了解なくては、興味オモミの半を殺ぐわけだから、聊か蛇足の註を添へた。但困るのは、其の頃誰れも見知つてゐた賣物の看板などが、今となつては分からず、他書に見當らぬもゐる。何分百年前の市井の風俗を寫したのだから、言葉の外の事柄を知るのが、中々むづかしい。兎も角も、あまり下卑た事などは省いて、知れた事だけ註解して置いた。今活字の便をかりて出版するに就いて、「都のてぶり考證」などと、仰々しい名を付けたが、實はほんの猿の人真似、彼の六樹には三本足りない、三樹園の主人の物ずきといふ外はない。

## 都のてぶり考證

三樹園主人著

### ごみさはの市

大江戸のうちには富澤といへる町あり。朝市とかいひて、ろこにゐるあきびどの限り、つとめてより起き出でて、門の外にむしろ敷きまうけて、古き帯、なえはめる衣など幾らともなく積み並べてあきなふ。明けはなる頃より、かしがましきまで人集ひきたりて、ねのが

○富澤町。日本橋區内で俗に大門通りから北へ入る、久松町明治座前の堀を越へた所で、昔は古着屋が多く毎朝店前に進を敷いて市をしたと云ふ。此の古着市の起立について、落穂集に説があるが、長くもあり、疑はしい説でもあるから略する事にした。

○紅ベニのいろはしらめる。源氏物語末摘花の巻に、常陸宮の姫君の装束を「ゆるし色のうはじらみたる一重ね」云々、註に今案、紅紫の深色は、禁色となづけ、淺きを許し色と云ふとある。上白みたるは、其の色の又淡く襪めたので、當時の詞では、緋縮緬の色がさめて、夕七時半時になつたさか。土器色などいつたのにあたる。

○紫ムラサキのいろはかくれたる。枕草子昔覺にて不用なる物の條に



ほしと思ふものは求めつゝいぬ。  
 新しげなるはふつになくて、紅クレナキ  
 のうはじらめるもの、紫の灰ねく  
 れたる類ひのみぢあめる。或はど  
 きいぬの亂れたる、藤衣フヂコロモのまどは  
 なる、不知火シラヌヒの筑紫ツクシの綿ワタ、河内女カハチメ  
 の手ぢめの糸、陸奥ミチノクのしのぶ摺ズリ、  
 いせをの海人アヲの鹽衣シホコロモなどさへこ巨モ  
 ら見ゆ。ろも山吹の花色イロハナころも、  
 ぬしは誰れどか問ひ知るべき。又  
 淺黄アサギのもめんどいふものに、花橘

「みび染の織物の灰かへりたる」とあるから出てある、春抄に「葡萄染は薄紫なり。紫は椿の灰をさすものなれば、其の色のさめたるを、灰返るといふ也。」とある。  
 ○さきいぬ、萬葉集十二に「解衣の思ひ亂れて燃ふれども何の故ぞと問ふ人もなし」とある詞をさつて、俗に「引きさき」といつて、裏をも縫ひ糸をも皆こいたものにあつたのが面白い。

○藤衣フヂコロモのまどは、是れも萬葉三に「須磨の海人の鹽焼きさぬの藤ころも問違くしあれば未だ著なれぬ」と註に「藤布の織目のあらく、問違きを、住所の遠きに云なしたり」とあるが、爰は布の地の薄い、俗に豆の洩るといふ様な、籠服カゴロのこま。藤衣は藤莖の綴維で織つた上古の賤者の服で、貴人も喪中は、此の籠服にやつれて居たから、喪服の異名にもなつたのである。

○しらぬいの筑紫ツクシの綿ワタ、同書に「不知火の筑紫の綿は身につけて未だは着れど暖かに見ゆ」とある。上古綿さいふは皆真綿の事で太宰府九州から、京都へ輸送したもので、

を染めつけたるも、こちなげにて、殊更に昔の袖の香、なつかしども覺ゆず。

其の中に袂ゆたかなるから衣コロモは、誰が嬉しきをつゝみたらむ。胸ムネわひがたき細布ホソヌは、物思ふ人や着ならしけむ。麻衣アサコロモの肩カドのまよひたるは、新防人ニヒサキモリの褌ケの衣キヌならし。花田の帯の中絶ニヒサキモリたるは、石川のこまうどの、解き捨てしなごりなるべし。薄ものゝひとへを見ては、す

だ。不知火は、今も八月に肥後の天草洋に出る燐火の事で、筑紫(九州)の枕詞になつてゐる。

○河内女の手染の糸、續拾遺集一に「忍ぶれば苦しきものを河内女の手染の糸の色に出でなむ」とある歌に據つたのだが、上に筑紫下に河内と對したゞけで歌の意は本文に關係がない。

○みちのくのしのぶすり、しのぶもぢすり誰れ故にと、古今集に出てゐる。小倉百首にもあるから知らぬ者はない。

○いせをの海人の云々、後選集戀三に「鈴鹿山伊勢男の海人の褌衣汐なれけるさ人や見るらむ抄に、海人の海に入る時、ぬき捨ておく衣を云。鹽なれ見苦しきを恥づる心なるべし」とある通り、見苦しき衣を聞かせたのであらう。あまは女には限らぬ男女に通じていふ。

○山吹の花色衣、古今集俳諧に「山吹の花色ころもぬしや誰れ問へど答へず日なしにして」

○昔の袖の香、同集夏、「五月まつ花橘の香をかげば昔の



人の袖の香ぞする

○こちなげ、骨無げの字音語。無骨の意だから、野暮な模様をいつたものである。仍てなつかしきも覺えずと、矢張歌の詞で云ひまはしたのが妙である。かういふ所は、澤山あるから、氣を付けて御覽なさい。

○袂ゆたかなる、古今集雜上「嬉しさを何につゝ、まん唐衣袂ゆたかにたてさいはましを」

○むれあひがたき、後拾遺集戀二「錦木はたてながらこそ朽ちにけれけふの細布むれあはじさや」上の袂ゆたかは、上等の衣類をいふので、此のゆたかなる袂には、得意の人が、いかに嬉しさを包んだであらう。胸あひ難き細布は、志を得ぬ人が、著ならしたらうと相對したのも面白い。舊説に、錦木は奥州の風俗に、彩色したる小木を、懸想した女の門口に立てるのを、女が家に取り入れれば、逢ふといふし、取り入れれば、逢はぬし、ただいふ。けふの細布は、希婦といふ地で織る巾の狭い布で、これで縫つた衣は、狭いから胸のあはぬといふ

べり出でにし空蟬の心しらひを思ひ、綿袍の厚をぬたるを見ては、寒さを憐みし范叔が昔もしのばる。縋袍のやぶれたるが、狐貉の皮ぎぬの中にまじはれど、どばり帳の垢づきたるには、聳の大君もにげめやつかふべき。法師のかくる袈裟に、あまた所ひきやりしあど見ゆるは、西寺ニシテラの鼠のくひたるやらむ。琵琶の緒に腸斷ゆといひけむごと、うちつけに亡き人の形見に

やど、あいなき衣さへまじりてあり。

又今様の湯かたびらに、藍もてさまざまのかた染めたるなど、一つひとつにわけいはんも、煩はしければ洩らしつ。をのこの禮服とすなる物の中に、上の衣ウヘの袖キヌをきりて、上下カミシモと名づけたるものあり。これに次ぎて、ふみこみ、はち、もいひきなどいへる物、上りアガりての世人は、見も知らぬ物なるべし。

を、逢はぬに掛けたのを、又身幅のせまい衣物にあてたのである。

○麻衣の肩カミの云々、萬葉七「今年ゆく新防人の麻衣肩のまよひは誰れかさり見む」防人は外寇の防ぎに、筑紫の崎々を守る兵で、今年新に派遣されるのを、新防人といふ。肩カミのまよひは、肩の所の織絲のひけて、破れんこと、妻に離れて一人行く防人は、其の衣の破れをも、誰が取繕らうであらうかと、妻の心を詠んだ歌である。

○けの衣キヌ、不漸着のこと。けは常といふに同じ。

○花田の帯、花田は藍色の名、本字綴さかく。備馬樂といつて、昔酒宴の席などで誦つたものに、「石川の高麗人に帯をさられて辛き悔する。いかなる帯ぞ。花田の帯の中は絶えたる。」石川は河内國の郡名、そこに歸化の高麗人を住ませた事がある。其の高麗人との戯れを、後悔する歌である。



かゝるくさぐさのふる物を集めて、馬に負せ船に積みなせして、越の國陸の奥のはてまでも、もて行きてひさぎ賣り、ろれより蝦夷が千島の遠き境にも、行きわたる事とぞ聞く。かゝるものは、もどたつきなきわび人の、あした夕べの煙りたてかねて、せんすべなきまゝ、貯へたる衣どう出て、あし幾ら黄金いくらとて、除り借りつるを、八月の程にあがなひ得ざれ

薄織の單衣をすべし置いて、其の身のぬけ隠れた志を、床しいさいふのであらう。  
 ○緋袍 是は范雎の故事で、史記の列傳にあるから、誰れも知る事ながら、ザット頭末をいへば、雎曾て魏の買頭に従ひしが、故あつて逃げて秦に至り、張祿名のつて宰相になつた。買は知らずして秦に使した時、范雎微行して買に見えた。買は死んだと思つた雎が、哀れな状を見て、「范叔一寒此の如きか。」と云つて、一緋袍を與へた。後に雎が秦國の相に成つて居た事を知つて、罪を謝した時、雎が云ふに、貴様の死すべきを免すのは、先日緋袍戀々故人の意あるを以てなり。昔を忘れぬ故意に對するのだと、云つたとある。緋は今の袖の綿衣。  
 ○あつこえ 源氏筆木に、なえたる衣ごものあつこえたるさあつて、厚肥の意で綿入れ衣の厚くふくれてゐるのいふ。  
 ○緋袍狐貉 賤者の布子と、狐や貉の裘の美服とである。論語子罕篇に、孔子が門生子路の行を稱めて、敝れた緋

は、定まれる事にて、物貸す人の心に任せて、かゝる所には賣りわたしぬるとぞ。  
 すべて新しきに比ぶれば、ふる物は價ひいやし。されどよろしき人の、これを求め買はんやは。買ふもの失ひし人、どもに又たわび人なれば、かゝる市の賑はしきころ、世に貧しき人の絶えざるしるしなれと思へば、例のもろき涙のはろくどこばれ出づるを、朝の

袍を着て、狐貉の美服したる者と、立ち並んで恥ぢる顔なせぬ者は、それ由歎きいつた故事。由は子路の本名。  
 ○さばり帳 龍馬樂に、「わいへん(我家)は、さばり帳をかけたれば、大君來ませ程にせむ。み肴は何よけむ。鮑さだえか、かせよけむ。」此の詞に據つたので、にげぬといふも、源氏筆木に、式部丞が森食の女の許を、走り出る所にある。湖月抄に逃げ眼になりての心也さかき、評釋には當時の俗語だらうと書いてある。兎に角逃げ支度をする趣さ見える。  
 ○西寺の鼠 是れも龍馬樂に、「にし寺の老い鼠若鼠、御裳つんづ、袈裟つんづ。法師に申さん、師に申せ。」とある。昔の法衣は、上下別で、下の袴の様なものを裳といつた。つんづは縮みつて、向箇で喰ふ事だ。枕草子似げなきもの、條に、「老いたる翁の椎つみたる」とあるも椎の實を喰ふ事なつたので知れる。  
 ○琵琶の緒に 此故事はサヨット分らぬ。琵琶行かと思ふが、下の亡き人の形見さいふ所がさうでない。是れは



露にかこちなしつゝ、鳴く音悲し  
き千鳥の橋をうちわたりて、かし  
こへ急ぎぬ。

あとで能く調べて見よう。  
○湯かたびら、當世流行の中形模様の浴衣の事で、かゆ  
たは湯帷子の略語である。元は浴場のみ用ひたから、  
湯帷子といったので、和名抄榮花物語玉の飾の巻にもあ  
るから古い詞だ。

○衣の袖をきりて、是れは永祿の頃、松永久秀が素襖の袖を切つて、上下を作り始めたといふ説のあ  
るに、據つたのであるが、實はさうでない事は、伊勢安齋翁の辯もある。又上下と肩衣との事なども、別  
に書いたものを、日本百科大辭典に載せておいた。長いから略す。  
○ふみこみ、袴の一種で、元は縹などで製つたもの、踏籠の義だと、和訓栞にあるが、文化時代には、  
野袴といふも同じもので、幅の狭い袴の事である。  
○はち、絹製の股引を江戸でパッチと云つてゐた。股引といふも同じものだが、木綿製に限る。パッ  
チは朝鮮語だと和訓栞にもある。元彼國から移つたものか。  
○あし、錢の事は誰れも知つてゐるが、古い詞で、近世の俗語でない。俚言集覽に「日本紀、紺字  
をアシナと訓り。今いふサシ也。錢の事を、當時よりアシと云ひならはす故に、紺をアシナと訓せし  
ならむ。」といつてゐる。此の訓は、日本紀撰修の當時か。其れよりは後に附けたかは知らぬが、後とし  
ても餘程古い詞に相違ない。徒然草の盛親僧都が「しらを好いた物語の所にも、「三百疋ないもが  
しらのあし」と定めて云々、又別用に用ふる事なくて、其のあし皆になりぬ」などともつかつてゐる。

借又何故、錢をアシと稱へたかといふに、晉書に、魯褒が錢神論を著して、無レ翼而飛、無レ足而走、  
さかいた所から起るといふ説が古い。がそれよりも大成經に、錢の異名を龍足といひ、又料足とい  
ふとあるといふ事だ、もし僧徒が佛典の中から引出して、云ひ始めたのであらうと思ふ。  
○八月の程に云々、是は質屋といふへ、衣類を典物にする事をいふので、入箇月を貸借の期限とする  
が、據であつたと見える。此の期迄に元利金を拂れば、質流れといつて、古着屋の手へ渡るのだと。  
○ほろく、源氏みゆき、宇治拾遺などに、ほろくさなくといふ詞がある。枕草子には、木の葉の  
散るに、ほろくさあるから、涙の落ちる形容にいふのであらう。今いふホロクに同じだ。斯様な事  
までいつては、際限もなくなるから、大概にして置かう。  
○千鳥のはし、濱町の方から右の方へ二筋ばかり入つた所にある小橋で、宮澤町の方から橋町へ出て、  
兩國橋詰廣小路へ來る道だ。



## 兩國の橋

大江戸より本所へわたしたる橋を、兩國橋とぞ呼ぶ。古へ此の川よりをちば、下つふさの國なりければ、然名づけたりとある人いひき。在五中將の「遠くも來にけるかな」とわび給ひし隅田川は、此の上つ瀬にして、淺草なる大ひさも、此の流れよりとりあげ奉りけるとぞ。富士の根は更なり、増すかげ

はなしとよめる筑波の山も、手にとるばかり見ゆ。ろころ行きかふ船の多かるは、唯柳の葉をこき散らしたるが如し。夏の頃は殊に船あまた集ひて、絲竹の音、川波にひもき合ひて、怖ろしきまで聞こゆ。げに廣き都の中にも、なぐらふべき所だになく、こよなう賑ははしきわたりになむ。川つらには葭を編みてへだての垣となし、すのこだつ物あまたな

○兩國の橋 例の伊勢物語に「ゆきくゞて武藏の國と下つ總の國との中に、いと大きな河あり。それを隅田川といふ云々」とあつて、其の頃此の川むかう木所寺島邊即ち葛飾郡は下總の國に屬してゐた。然る所鎌倉時代建保の頃から、郡も川も武藏の國に附いたので、それを又再び元の下總の國へ返されたのが、室町時代の末、扱後に今の如く武藏の郡に定められたのは、恐らく貞享元祿の間であらうと、松屋の棟梁集に考證してある。それから此橋の出來たのは、萬治三年と事跡合考にあるから、其の頃は無論兩國の界であつた。乃て兩國橋と名づけたといふ。然し事跡合考や武藏經といふ古い書物には、皆大橋とばかり記してある。是れは大橋といふが始の名か。又唯長大なる橋だから、別名同様に大橋と稱へたので、始めから兩國橋と名づけてあつたかは今しか分らぬ。○在五中將の 古今集醫旅に「此川の邊におり居て思ひやれば、遠くも來にけるかな。とわびあへるに」とある末に、在原業平朝臣、名にしおはば言問はんの歌のある

事は、誰れも知つてゝあらう。  
○大ひさ 淺草金龍山の觀音様をいふので、大ひさは大悲者。觀音様の事を大悲菩薩ともいふ事が、經文にあるからである。此の觀音一寸八分の尊像は、此の川(上古は宮戸川)で土師臣中知と云ふ者、家臣楡隈濱成武成といふ兄弟と共に、漁獵した網にかゝて上つたのを、一字の香堂に安置したのだといふ事が縁起にあつて、誰れもいふ話柄だから、翁もチヨットかいたのであらう。  
○ますかけ 古今集大歌に「筑波根のこのもかのもに盛はあれど君がみかけに増すかげはなし」  
○夏の頃は 殊に賑はつた様子で、此の頃の書籍に、いろくゝかいてある。毎年五月廿八日を川開きといつて、八月廿八日まで、納涼舟遊山の季節とした。其角が「この人敗舟なればこそ涼みかな」一兩が花火間もなき光かな」など口吟んだし此處の事で、當時江戸の家客繁華な趣が思はれる。今も川開といふ名は残つて居るが、當夜の流花火に昔のおもかげを見せるばかりで、一向船遊びは流



らべて、いこふ人毎に茶をもてあ  
 きなふめり。又同じつらなる假家  
 つくりて、小弓の射場をせうけて  
 いと茶なみとする者もあり。髪つか  
 ぬる家、船かす家、もちひ、くだ  
 もの、酒賣る軒など、所せき迄た  
 ち並びたり。すべて名高きあき人  
 の家々は、數へ盡すべうもあらね  
 ばうちれきていはす。

此の大路の中に、薦ゴモス垂ダレかけ、  
 假屋作りて、外どの方にわやしき繪

をかきてかゝげたるあり。肩衣さ  
 たる男の、戸口に立ちて口に手を  
 あて、聲高く呼ばひいへるは、  
 「こは丹波の國なる奥山にて捕へ  
 つるやまあらしてふ獸なり。よに  
 けうの物なり。前代未聞又類ひあ  
 らじ。家づとによき物語の種ぞ。  
 見たらむ後に錢れこしね」と、聲か  
 るゝばかりのゝしる。さるはむさ  
 さびの大きなるを捕へて、かうは  
 こらしげにいふ也けり。

行せぬ。  
 ○渡ワタをあか、は所謂渡ワタをハり  
 床几のこま、水茶屋の店である。錫庭子の「聞のまにく」  
 寛政十二年の條に、此の頃水茶屋女、容色評判高かりし  
 は、淺草隨身門難波屋おきた、兩國橋高島屋お久、神明  
 前菊木屋おぼん、此の三人殊に勝れて錦繪にも出たり。  
 さある通り、綺麗な若い女を置いて、客を釣つたものと  
 見える。今淺草公園などの銘酒店は、昔の水茶屋の變體  
 だといふ事だ。

○小弓の射場 後世矢場といつて、楊弓を射る店であ  
 る。近世風俗志に、「江戸は淺草奥山、日本橋四日市、  
 兩國橋西、愛宕山、神田明神、湯島菅原、芝神明宮、皆  
 之を矢場といふ。」とある。さて此の楊弓といふ名には、  
 むづかしい唐土の説などが解遊笑覽にもある、それは措  
 いて、この技はもと家庭の遊技で、大名の奥向などでし、  
 室内で弄んだ。決して卑しむべき業ではなかつた云ふ。  
 弓の長さは二尺七八寸、上下管シヤウゲハツや、附ユツカなどに銀金具を打

つて頗る精巧な彫繪、又矢の長さも八九寸位、孔雀の羽  
 などで知れた美麗な品を見た事がある。いかさま大名の  
 玩具だと思はれた。其の矢鏃は鹿の角で造つてあつて、  
 室内では衣桁に小袖をかけ、其の真中に櫻の木で造つた  
 的をかけておき、座して射て此の矢が中れば、カチンと  
 音のするやうに鹿角がはめてあるのだと聞いた。是れが  
 何頃からか市井にも流行り出して、寛政以後天保の頃餘  
 程盛んに、維新後も神社佛閣の境内を始め、人の群集す  
 る所、又は小路の蔭くらき所などに酒サカつたのを、警察の  
 取締が嚴重になつた爲に、段々廢つたと云ふ。弓を射る  
 といふは表面で、裏面を的とした魔窟であつた事は云ふ  
 迄もない。  
 ○こもすだれ 小屋かけの見世物の状をかけたのだ。當  
 時は宮地芝居などいふ興行ものは、皆ソラムシロ藁席を四方に垂  
 れて居て、其の目の業終れば、前面の席を撥ね上げておい  
 た。今も芝居や寄席の閉場した事を、ハネタといひ、名  
 詞にしてハネタといふは是れから出た詞である。



其の隣も同じ筋なる假屋作り  
 て、うすぎぬかづきたる女子を高  
 き所にすゑて、うしろには白き青  
 き紙をへだて貼りたるあかり障子  
 を立てつ。添ひ居たる男の、扇を  
 さかさまにとりて、まづしはぶき  
 を先にたてし、見る人にむかひて  
 いへらく、「此の女子こそ、越の國  
 何某の村なる獵人の子なれ。殺生  
 の罪の子に報いて、かう怪しき身  
 とはなりたり。されば十が一つ

○あやしき繪 看版の事、俗に下品な繪。  
 ○やまあらし 和訓栞に「濠猪也さいへり。蠻國より來  
 る。蠻名エイツルコさいふ。安永六年に來りしは、咬嚼  
 吧の座。」とある。是れに日本で山荒さいふ名をつけたの  
 である。私が幼時に見たのは、形、鼠に似て大ききは小狗  
 程あつた。總體に杉箸ほどの太さの、末の尖つたのが生  
 てゐる獸で、近頃では珍らしくもないが、安永の頃は船  
 來したばかりで、一時大評判であつたさ見える。其のま  
 がへ物に、鼯鼠を出して、田舎漢を欺いて居る様子をか  
 いたのである。

○見たらむ後に 是れが一般見世物の木戸でいふ極つた  
 文句で、私が幼時の記憶にも「丹波の山奥で生捕りまし  
 た、山荒でござい。——お宿へのおみやげ——代はおも  
 どりてよろしい」といつて居た。

○むさいび 俗にモモンケリアといふ獸だ。近代世事談  
 にある。是は萬葉集の歌にもよまれてゐる木邦に産する  
 獸で、蝙蝠のやうに翅がある。深山木を傳つて、木の實

を喰ふさかいてある。

○あかり障子 昔障子といふは、昔今の唐紙襖、衝立の  
 類をいつたので、たまく格子に白紙を貼りつめたのを、  
 明り障子と稱へて、鎌倉時代から弘まつた。それ故に爰  
 にも殊更かうかいたので、全く今の障子のことだ。

罪障の消ぬ失せなんよすがともな  
 れどて、こたびゐて來て、あまね  
 く人に見せ奉るなり」とて、彼の  
 薄衣をどりのけつれば、げに云ひ  
 しにたがはず、顔より手足まで、  
 一つらに黒き毛れひつゞきて、目  
 鼻のつきどころさへ分かつた。熊  
 をんなど名づけつるもことわりに  
 ころ」と、人々うちまもりあさむ。  
 かゝるかたはにさへ生れにたる  
 を、かゝやかしう人集めて見する

○まもり 目守で、見つめること。あさむは呆れると、  
 但しあさむと濁らぬがよい。あさましといふ語と一つだ  
 から。かゝやかしうは、耻かしく目ばゆいこと。昔出據  
 はあるが、省いていふまい。



事よ。彼の女いかにわびしう思ふらむ。なが名はいはじどうち戯れて出でぬ。

向ひなる家は殊に人多く聚りてり。こゝは女子を六七人集めて、「ふこ」といへる今様のうたひものを誦はす。こはあだくしき男女のみろかごとせるがあらはれて、せん術なく逃みに死なむと契りかたらひし事なぞあるを、かゝるふしものにあやなしとなり。此の頃

○なが名は、萬葉集十一に「荒熊の住むさいふ山のしほせ山せめて問ふとも汝が名は告じ」熊女の見せ物だから、荒熊のさいふ詞も縁があつて面白い。私が幼時までは、こんな見せ物も多かつた。勿論拵へもので、真物ではない。かういふ興行師を、因果物師と呼んだ。

○ふこ、是れは豊後節を語る女淨瑠璃の演奏場である。「ふこ」は豊後の字音で、中古の假名草子に、豊後介を「ふこのすけ」備後守を「このかみ」などと書いてある例に據つたのらしい。此の翁の事だから、一寸しても出據のない事はかゝぬ。江戸節根元記の下に「京都宮古路岡太夫節、芝居にて今に捨らす流行なり。弟子文吉と云者、元文中東都に下り、宮古路豊後太夫と名乗る。三絃鳥羽屋三右衛門、佐々木市藏云々、其後加賀太夫、數馬太夫杯

世の中ゆすりて翫び興すれば、さてこゝもかうは設け出でたる也けり。げに世ごもりたる人などの、かうざまの事に耳なれゆかば、自然にあだなるすさみに心や引かれむ。女子には聞かすべきものども覺ゆす。又高さあぐらに上りゐて、文机の上には、はうし木のかたしを置き、古き世の軍物語をまねびしふ。信にや偽りにや、己が目に見し

さて同門あり。ソキを語り彌々はやりしが、所々にて色事心中欠落もの等あまた有之故、豊後節御停止御觸被三仰出一御法、度に相成止みけり。其れより久々打絶えしが、後に京都本町位牌屋文右衛門といふ者、義大夫節をよく語る。上方より一中と云者、文右衛門を尋來る。文右衛門一中に彼節をならひ、夫より工夫して、佐々木市藏を相方にし、義大夫一中豊後節押突て語る。是れ中興豊後節の祖なり。夫より又流行りて今に繁昌なり。(以上節略)とあるので豊後節の事がよく知れる。こゝは論勿中興以後の事と思はれる。○ゆすりて、源氏須磨に、世の中ゆすりて惜み聞ゆとある。世人舉つてさいふさ同心だ。○よこもり、世籠るの意で、年のゆかぬも、源氏物語など少き姫君によくいふ詞で、春秋に當むさいふに同じだ。○あぐら、上座の義で中古床几の事をいふ。爰では高座を構へた事である。是れは辻講釋といつたものだ。



と語りなすもをかし。

片つ方に人あまた集ひたる所あり。何ぞとのぞけば、黒き管二つ並び、これに大きな太刀二つを掛けねきつ。若き男の裾ひき上げて、たすきゆひたるが、高あしだはさて、ついがさねの様なる物二つ重ねたる上にのりて、この太刀をひき抜き、さまざまに打ち振りて、とみに鞘にをさめなす。すさと見わたる男、これもたすきひきゆひ

○はいし木 元雅樂を奏する時拍子なうつた事から、木なうつて音を出すものを、皆拍子木といふ。  
○かたし、唯片方のこと、しは助辭、是れも古い詞で、源氏や枕草子にある。昔は軍談師皆拍子木で机を叩いたのを、田邊南胤といふ者から張扇はりあふを用ひる事になつた。それ故較後までも、伊東派は古風に拍子木を張扇はりあふと聞いた。近世は其の別もなく、甚しきは拍子木と張扇と、二本で叩いた修羅場讀もあつたのを記憶してある。  
○己が見しこと語りなす「講釋師見て來た様なうそを吐き」と云ふ古い狂句のころを書いたのも面白い。  
○黒き管二つ並び、是れから居相抜の事だが、今は廢絶したから一寸いほう。賤の小手巻に「其の頃(享和)松井屋源左衛門と云ふ者あり。尚磨齋なり。眞鍮の金物打たる黒塗の管を重ねたる高荷を、兩掛にして小者に持たせ、赤阪見附下の廣小路に出て彼高荷を兩方へ構へ、居合刀(尤双引にて能く磨たる也)三尺計りなるを第一とし、夫より寸劣の刀を品々掛て、居合を抜く也。手練、

て、是れは今少し短き刀をぬきて、まどうちあふまねをす。

さて彼の人のいへるは、「かゝる太刀打のわざは、唯もろ人の目を喜ばしめんわざなり。まこと吾が家の營みは、藥鬻ぐ業にこそあれ」として、さゝやかなる紙づつみ二つどう出で、「此一つは返魂丹といひて、家に傳へたるらうやくなり。おだはら、わくだの病、あるは尻より口よりこく病、舟病ひ、酒やまひ

目を驚したり。後は足駄をはいてぬき、又は三方の上に登りて抜たり。」とあるので、大概は知れるであらう。居合とはも室内に敵と對座して、居ながら刀を抜き合せて、打ちあふ術をいふ名である。私が幼時見たのは、五尺程の太刀をも抜いた。祭禮開帳などの場には、必ず出てゐた。江戸名物詩にも出てゐるから、江戸に限つた者であらう。

○高あしだ 和名抄に履、阿師太さあつて、足下の義だから、足駄さかくは俗字だ、今足駄といふと、高いに極つてゐる様だが、平治物語に高あしだ、今昔物語に平あしだといふがあるから、翁の高といふ語を添へたのは、本義になつてゐる。  
○ついがさね 三方の事だ。尤も中古のは、後世の三方と少し形がちがふ。三方の名は、室町時代からいふ詞である。  
○すま 従者の字音語、源氏枕草子など、皆すまとある。宇治拾遺にすんざと撥ねてもいへてゐる。前にある小者



いづれに用ひても、とみにしるし  
あり。又こなたなるは、齒を磨く  
藥なり。此の藥、むしかめばを癒  
し、口のうちの臭き香をのぞく、  
齒を白くせむことは、殊に速なり」  
なぞいひて、錢一つを彼の藥もて  
磨くに、十日の月の、雲間を出づ  
るかごと、照り輝きて見ゆ。皆人れ  
のがじし求めて往ぬ。

こなたなる霞のかこひの中には  
かたるの頭巾きたる、扇を袷のあ

たりにさして、上なか下の人のう  
へを、面白くまねび語る。うしろ  
の方に若き女三四人並び居て、か  
いひきうたふ。とばかりありて、  
錢もどむとて、彈きさし立ちて、  
小きこを、人のむなぢのあたりへ  
持て来て、ふりろごかす。つれな  
しつくりて、錢もやらで出でてゆ  
く人あるを、彼のかたる見て「權  
兵衛のうらさたなし。正ならもう  
しろを見せ給ふか。馬かへされよ。

○あだばら 和名抄に痛、阿太波良、腹急痛也とあるが  
ら、其の頭胸腹の痛みさいつた病だ。○あくだ、同書  
に、蛭虫さかいて、人腹中長虫也とある。懐中の虫とい  
つた所に、あてたのである。  
○尻より口より病 是れも同書、霍亂を之利與理久  
智與理古久夜萬比としてある。至つて長い病名で、其の  
頭彼の輩が吐き下しと唱へた。  
○むしかめば 同抄に、齧齒さかいてある。今單に出齒  
といふ。虫の齧む齒といふ義である。

○かたあ 乞丐の事で、古くから路の側に居て、物を乞  
うたから、側居といつた。後世癩病をカマ非病といふが、  
元は癩病者が、多く乞丐となるからいつたので、病名で

はない。俵是れば俗に豆藏といつて、諧謔物眞似をし  
て、聽衆を笑はせた者であるが、豆藏などは、乞食頭乞  
胸仁大夫の支配だから、翁もカマ非さかいたのだ。近世  
風俗志に「江戸にて豆藏は、京阪の輕口と異なる事なし。  
淺草奥山に二所、兩國橋とあるが是れだ。但し同時に辻  
放下、輕業の類を、豆藏ともいつた。齋諧俗談といふ書  
に「貞享元祿の頃、攝津國に一人の乞士あり。名を豆藏と  
いふ。市中に出て、常に重き物を捧けて錢を乞、又小兒  
を梯に登らせて、其の身は楊枝をくはへ、梯子を楊枝の  
先に立て、起ち居行く事に任す云々」此類の業をし  
手品をつかふ者を、豆藏といふは是れからで、別に輕口  
を豆藏といつたのは元眞似藏といつたのを、即呼の近似  
から、豆藏になつたのかと、嬉遊笑覽にも見える。  
○彈きさし 三線を引さかけて止めること。  
○むなぢ 胸乳の義で、唯むねといふより古言になる。  
○こ 籠のここ日本紐や萬葉にある古い詞だ。小さな  
箆を竹の先へ結び付けて、遠くから聽衆の前へさし出す



をう〜」と呼ぶに、皆人笑ふ。  
 さてかたみなる錢かぞへ見て、  
 「おな嬉し百ばかり集りて侍り。  
 いみじき御惠になむ。」などいひて  
 かけたる錢一つどうでて、「是れ御  
 覽せさせ給へ。半ばかりに成りに  
 たり。物惜みし給へる人の、かゝ  
 る物どう出てたびぬ。是れもて歸  
 りて、いもじに誂へなば、六七文  
 の錢や費やさむ。おなやうなし。」  
 などいひて取り隠しつ。」さても増

のであつた。  
 ○つかないつくり、同情のない様子、知らぬ顔をするこ  
 と。是れも源氏にある。  
 ○かたみ、篋の字をかく。小さい竹籠のこと。  
 ○かけたる錢云々、聽衆の中に、たま〜戯れて、毆損  
 た錢などを與へると、目疾く見付けて、ろれに就いて又  
 誂語をいつたものである。

○いもし、辯物師で、彼れが口からは辯掛屋といった。  
 ○やうなし、益なして、伊勢物語の口調でかいたのだ。  
 語俗エ、ツマラヌ。

す蔭もなきささんだちの御がけによ  
 りて、餓ゑず寒からず世を營み侍  
 りぬ。常もめこなる者ををしへい  
 さめて云へらく、必ず殿ばらの御  
 惠をあたにな思ひる。ひとへにれ  
 のれが親と頼み奉れ。ところいひ  
 つけ侍りしか。能う思へば、己れ  
 が親と聞ゆる奉るからは、君達の爲  
 に己れは子にて侍り。さばかり良  
 き子をもたせ給ひて、世の聞ゆる  
 うばくやれはすらむ。」などいへ

○ます蔭もなし、前にも引いた古今の、筑波山このもか  
 のもに蔭はあれど、さいふ歌の句。  
 ○めこ、妻子のことさは、誰れにも知れるが、妻をツマと  
 いふのは後世の事で、昔は夫妻、いづれもツマといつた。  
 今の詞で連合さいふのにあたる。萬葉でも竹取源氏物語  
 枕草子の類、夫に對する妻の事は、必ずメといつてツマ  
 さはいはぬ。爰もツマこそ書かず、メこそかいたのは、  
 流石に翁だ。

○めいぼく、面目の字音語、源氏繪本に、中川の宿へ、  
 光君の方邊に行つた時、主の紀守喜んで、遣水のめいぼ  
 く、さかいてある。



ば、人また例のとよみ笑ふこと限りなし。

又人形をかしらより手足まで、あまたの糸もてつけて、唄ひ物に合せて、糸ひきあやとりつかふを、南京のあやつりと名づけて、昔よりこゝにて行ふ。をさなき者は、皆これに心よせつゝ、集ひ寄るめり。

柳の橋の方に添ひて、殊に高やかに假屋作りたるあり。京下り某

○南京の操り、當時評判のものを見て、風來が六部集中、兩國の見せ物ないふ條に、硝子細工、奈絲傀儡、ふるきを以て新しく田舎道者の目を悦ばしめ」とあるし、又馬琴の燕石雜誌にも「南京操といふ人形は、子が少かりし頃まで、兩國橋のこなた、廣巷路の勾欄にてしたり。狂言は、一年中國姓爺の虎狩の段のみをして見せたりしが、いつの程にか絶えて、其の跡今は興業をする也。」とあるから、文政以後に絶たせ見ゆる。

の太夫とか、いかめしく旗に書きたり。これも外の方に繪をあまたかきつけて置きつゝ。入りて見れば、袴をばぬぎて上ばかり着たる者三人ばかり、笛つゝみ打ちはやす。耳もとに聊か鬢の髪のことして、

頭なごりなう剃りすてたる翁の、同じごと上ばかり着たるが、見る人にむかひて、ざればみ嘯りいふ。彼の太夫、頭に鉢巻といふものうしろざまに結びて、手足みな赤き

○京下り某、是れは、竹わたり網たわりの輕業師だ。風來の六部集中、例の兩國の見世物の記事に、無三飛新藏が體は、龍骨車の強るが如く、早飛梅之丞が一本綱は、五體を天へ釣るか疑ふ」とかいてあるから、其の頃新藏梅之丞などいふ輩から、始まつた藝か。近世も早竹虎吉といふが、こんな離れ業綱渡りの上手で評判であつた。

○太夫、淨瑠璃語りに限らず。すべてこんな藝人を、皆太夫といつたものだ。甚しきは、蜘蛛男などいふかたは、侏儒をさへ、近年は太夫といつて居た。



絹にねしつゝみて、半臂ハンベのやうな  
 る物着て、出で來たり。見る人にむ  
 かひて、跪き拜して、さてふとく  
 長き竹の、三丈ばかりもやわらむ  
 と見るを中に立てゝあるに、すら  
 く登りて、竹のうらに身をど  
 ぞめて、扇どうでてうちあふぎた  
 るさま、いとやすげなり。竹は右  
 ひだりに靡きて、今や落ちなむと、  
 見る人心をのゝき目くれて、危ぶ  
 み思ふに、竹を膝にからみて居る

○半臂 古代装束の下に襲れて着た袖のない服の名であ  
 る。爰は俗に「チャン／＼といふ袖なしをいふのだ。

さま、常の人の地に坐したらむ如  
 し。さてあるは立ち、或は臥し、  
 仰ぎて舞ひ聳ちて踊る。其のさま  
 一方ならず。これにさまざまの名  
 あり。彼の翁、笛鼓に合せて、指  
 さしいふ。其の曲の名は、  
 達磨大師の座禪のゆか  
 野中に立てる一もと杉  
 唐獅子カラシの洞ホラの出で入り  
 東山の大的字  
 梢つたふ猿まろ

○達磨大師 曲の云ひたてで「達磨大師は座禪のかたち  
 ……獅子の洞入り洞返り…」などの口調でいつた。



卸落したる山がら

住の江のろり橋

松にはひたる藤なみ

猶正多こゝらあめり。さて長らへ引き  
はねたる綱の上を、からかささし  
てわたり、ながき紙の上をもわた  
るに、皆足ふみを、はうし拍子にあは  
せて踊る。見る人おさみ興せざる  
はなし。事終トドマシねれば、したゝかに  
大鼓打ちならして、「もと見し人は  
かはりね」と呼ぶ。遣戸ヤシロ一つわけ

○いたゝかに大鼓、うち出しさも、追出しの大鼓さしい  
ふ。  
○いさ見し人は、曲藝の最終に「お目止りますれば、先  
様は一切の入替り、三稱へて、客を裏木戸から出したも  
のだ。

て、人出だすに、押し合ひて出で  
もやられず。ほどくしりなる人  
に、あかゝりもふまれつべし。

向ひなる川つらには、水にひた  
りて十餘人ばかり、聲揃へて何事  
にかあらむ、高らかに唱ふ。こは  
重きばうざを救はむとて、垢離コリと  
いふ事行ひて、相模の國なる、あ  
ふり山の不動尊に、禱カガヤリ祈るなり、  
手毎にわらしへをもちて川に投げ  
うち、流るゝをよしとし、だゞよ

○あかゝり、和名抄に輝、阿加々利、手凍裂也とあつて、  
今いふ赤切の事だが、雑踏の中で、足をふまれるに、何  
故あかゝりなごさかいたかといふに、是れも例の典據か  
らで、神樂の早歌に、「あかゝりふむな後なる子、我れも  
目はあり前なる子」といふがあるから、チヨツとした事  
だが、それによつてかいたのだ。  
○ばうざ、病者の字音語、源氏帯木に、大貳の乳母のわ  
づらつてあるを、子の惟光が、ばうざの事にかゝつらひ  
さかいてある。  
○垢離、和訓栞に水濯する事だといつてある。垢離の字  
はあて字で、言義は川降の約語だといふ説もある。但神  
佛を祈念する時、身を清める爲、水浴する時に限つてい  
ふ。水垢離ともいふ。  
○あふり山、相州大隅郡の大山の本名で、阿夫利とかく



ふをあしどすとなむ。事はてぬれば、れのかじし衣着さわぐに、猶若きものは、こなた彼方に浮び潜き出でてあうぶもいと危ふし。す

べて此の橋の前うしろには、ひまもなく蚤人の家たちこみて、大君きませとよばへる軒には、鮎さたをか、きらくしう、我れ物申すといひたる家には、夏やせによきむなぎもありぬべし。  
あるは虎てふ神を木もてつくりす

が、雨降の意云。當時の商工などは、大山石尊大権現と唱へて、盛に信仰したものだ。今でも夏になると、東海道汽車を平塚で下車して、参詣する道者が夥しくある。○わらしべ、何の爲にするのか知らぬが、大山参りの者が、蓼葉細工をみやげにするも、何か縁故があるのであらう。

○あま、萬葉集には海士海人など書いて、アマもアマビトとも訓んである。アマはウミ(海)の轉訛語で、海上に漁獵する者だから、アマ人といひ、略してはアマとも云つた。それから廣く海ならぬ川狩でも、漁者をアマといふのだ。當時は此の川岸に釣人網打が多く居て、それが軒下には小魚などを並べて賣つたと見える。○大君きませ、備馬樂に、わいへん(吾家)は、帷帳をも垂れたれば、大君來ませ婿にせん。御者は何よけむ鮎さたなか(榮螺)甲贏よけん。」とある詞に據つた。「サア買

ゑ、又あらたまを障子にゑがきて、戸の口に立てたるもあり。五十嵐と名のるもの家にさしむかひて、芭蕉を壁にゑがきたるはつきくしう見ゆれど、ねぼろといへる豆腐をひさぎて、明石と名のりたるはいかにや。此の外、もちひを幾世の名にことぶき、煎餅を羽衣の松にながらふなど、取り出でて敷へいはんも、言のは足るまじうが覺ゆる。かゝる邊を經廻らひて

いにおいでく」と呼ぶ家には、鮎や榮螺が、繪籠に並んであるといふ意味だ。  
○われ物申す、萬葉十六に、「石磨に我れ物申す夏やせによしと云ふ物ぞむなぎ取食せ」とある。むなぎ、今の鰻の事で、此の魚は、胸が黄色だから、胸黄といつたのを、後世は轉じてウナギと呼ぶ。  
○虎てふ神、萬葉集十七に、「韓國の虎てふ神を生取りに」といふ長歌の詞をまつたのだが、木彫の虎を看板にしたのは、何であらうか。名物に虎屋饅頭と、虎屋艾といふのがある。恐らくは此の二つの中であらう。  
○あらたま、寶珠の事を、瑛さかいたので、稻荷鮎の商標だらう。昔狐を稻荷大明神の使姫だといつて、尊信したが、其の狐の寶珠をかいで、稻荷といふ謎にしたのだらう。  
○五十嵐、油元結など賣る小間物屋で、高名の舊家、彼の紀文大藏の後だといふ。この嵐といふ所から、向ひに芭蕉の繪は似合はしいといふのだ。是れは芭蕉が、



まゝと共に遊びさまよひしも、は  
や四十とせの昔どろなりにたる。  
げに年月の流れはやきは、此の川  
の瀬に劣らざる事、夢のわたりの  
浮橋を、わたり比べし人は、知る  
べきにころ。

初秋に葉を出して、秋の末の野分木枯に破れ枯れるから  
であらう。さて其の芭蕉を壁にかいた事に至つては、何  
を疑ふ店か分らぬ。

○おぼろ豆腐 淡雪豆腐の事で、江戸總鹿子増補に、淡  
雪豆腐、兩國橋東詰日野屋東次郎とある家のあとだらう。  
朧と明石(曇ト明)とが、反對だから、どういふ譯かとい  
つたのである。

○もちひな幾世 餅は糯米で作るから、糯飯の下畧語で、  
昔はモチヒといつて、モチとのみは決していほぬ。枕草  
子に、もち粥カユとあるは、望モチの日即ち十五日の節供に食ふ  
から、望粥といつたのだ。之を餅を入れた粥と注したのは宜しくない。さて幾世とは幾世餅の事で、  
近代世事談に、幾世餅、根元は兩國橋西詰にあり。前は鐵砲町に住して、すこしき餅を商ふ云々」  
耳袋に昔吉原の遊女幾世といふ者、人の妻になりて、餅店を出したるなり。」などあつて、有名な  
ものだ。粥を付けた餅で、一つ五文に賣つたといふ。

○煎餅を、羽衣の松 普通にいふ松風煎餅を、羽衣松といふ名から、羽衣煎餅と名をかへたのだとい  
ふ。松風といふ名も、此の煎餅は、表を焼いて色を付け、芥子をふり掛け、裏は白いまゝにして置  
くから、裏(浦)さびしといふ謎で、松風と付けたのだと、展龍工隨筆にある。幾世といふも、羽衣

といふも、めでたい詞や故事があるから掲げたのだらう。

○まゝ、乳母の事などは、雅言彙覽に源氏物語や枕草子を引いて證してあるが、猶言鏡第二、治  
承五年閏二月七日の條にも、乳母を摩々マカといつてあるから、鎌倉時代までも、つかつた詞と見え  
る。稚兒や其の親などが、直接乳母を呼ぶ時に、マ、といつた事と思はれる。

○夢のわたりの浮橋 是れはナト手のかゝるむづかしい事だが、先づ源氏物語の最終に、夢の浮  
橋の巻がある事は、誰れも知る通りだ。此の名の據る所は、河海抄に「世の中は夢のわたりのうき  
橋か。うちわたしつゝ物をこそ思へ」といふ歌を引いてある。古來何に出である歌だが、眞淵の新  
釋にも、木居鈴屋も知らぬといつてゐる。獨り此の翁ばかりは、源注餘瀆に「此歌、しらす物語に見  
えて、結句もの思ひぬるさあり」と書いてゐる。倍次に此の歌の解だが、鈴屋の玉かつま六に「歌  
の意は彼のうき橋わたらむとすれども、いと危ふき橋なれば、恐ろしさに渡りわづらひて、唯見渡  
しつゝ物思ふを、世中の憂きにながめして、物思ふたさへにいへるか。……夢の回ワタといふ吉野の名  
所(懐風藻萬葉三にある)なるを、源氏物語に、巻の名とせるは夢の事にされる也。……是れより後  
は、ひたすら夢の事となれり。」とあるので能く分かる。しかし雅望翁は唯夢の事にとらず、矢張前  
の方の意味にして、世の中のうき(憂に浮をかれて)橋をわたり比べ、辛苦をなめて年を積んだ者は、  
月日の過ぎる早さを知るといふ意にかいたのである。上に年月の流、此川(隅田川)の瀬とあるから、  
夢のわたりの浮橋のといふ縁語のある歌に、據つたのであらう。



ばくろの町

「大君は神にしませば水鳥のすだ  
くみぬまを都となしつ」とは、わ  
がりたる世によみたりけむ。げに  
野中ふる道あらたまりて、今ぞ都  
と備はれるなかに、鞍掛の橋の左  
右は、なべて人やどす家たちつ  
きて、いとく賑はしき所にな  
む。此のあたり、昔は海についけ  
る入江の沼なりとか。今はさるれ

もかげだに残らず。橋より北さま  
を、ばくろの町と呼べり。ろのか  
みはふりたる寺ならびありて、さ  
みしき草の原にして、橋の南は六  
本木とて中つ世のうまやぢとぞ。  
今はこてまの三つの町とぞいふな  
る。  
元祿の比はひまでは、人宿す家  
ども、此の三つの町に、はつかに  
十ばかりありしを、同じ六とせと  
しへるに、信濃の國なる善光寺の

○ばくろの町、江戸名所圖會に、「馬喰町三丁目西北の裏  
通りに馬場あり。江戸馬場のうち、最も古し。御馬工即  
高木源兵衛之を預り奉る云々、馬喰町といふも、此の由  
緒なり。」とある、馬喰は俗字で、伯樂の字が正しい。支  
那で伯樂と云ふは、星の名で、天馬を典るといふ故事か  
ら、古く馬を善く御する者を、伯樂といつた。  
○大君は、の歌は、萬葉集十九の卷に載つてゐて、壬申  
亂の平定した後の作とある。  
○今ぞ都と、是れも同集にある歌で、「昔こそ難波のな  
かといはれけめ今ぞ都と備はりにける」とある。  
○鞍掛の橋、小傳馬町三丁目より、馬喰町一丁目へいた  
る間の橋だが、今はない。  
○昔は海についける、慶長見聞集などに、慶長八年神田  
山を崩して、南方の海を埋め、南は品川より、北は神田、  
東は淺草まで、町續きになつたとあるに、據つたので、  
今の濱町霞町邊は、皆霞沼であつたといふ。

○橋の南を、六本木と稱へたといふ事は、江戸往古圖説  
に、「六本木村の跡、今の小傳馬町此の地に移らざる前の  
古名の山、是れ往還にて馬繼の宿なりとぞ。其の後大傳  
馬町(今の龍の口邊)と同時に、小傳馬町も同じ所より引  
けし由」とある。又事跡合考にも「御入國以前奥州街道  
の本往還は、相州馬入川上方より稻毛池上を通り、今の  
西丸下へ出て、本町通にかへり、旅籠町を北に折れて、  
小傳馬町(昔號六本木)を通り、淺草觀音堂の門前を通り  
云々」と記してある。翁も、此處に住んでゐたから、此  
等の説に據つて、六樹園と號したのだ。



御佛をもて來たり奉りて、本所なる回向院にてをがませしに、世の中ゆすりて是れにまうづる人多く、遠きゐなかのうはねきなまで、數しらすつとひ來て、此の宿りにゐあつまりつゝ、夜も大路にむしろ敷きて予明かしける。此の頃より、かゝるなりはひする者や、數まされりて、終にばくろの町のわたりまで、住みわたり營みする事とはなりぬ。今の人これを「はたごや」と

呼ぶ。うもはたごとは、馬草ウマクサいるるかたみ、あるは旅ゆく人のもてるここなどの名なりけるを、いかなる故わりて、かうは呼びつけたるにか。

家ゐのさま、門ごどにあるじの名をしるしつけたる札をかけ、明障子アキラにも筆ぶとに、同じごと書きたり。すすのこの下にとき捨てたるわらぐつ、うらなしなど、いくらも重なりあるは、矢矧ヤチの市もかう

○はたご 和名抄に、葉ハかいて飼ウ馬籠也とあるが、轉じて旅中の食物と、すべての雜物いれたる籠カゴなどもいふ事となつたさ、雅言集覽に宇津保物語の文を證してある。

○うらなし 本名緒太オトといつて、闇の草履カサの事だと、貞丈雜記にあるが、こゝは唯の藁草履ワラカサをいふのだ。  
○矢矧ヤチの市 三河の名所で、昔は此の市でわら履カサなど作



がなぞ覺ゆ。

あるじにや、しも男にや。町の  
辻にたゝすみをりて、旅人の過ぐ  
るを待ちつけて、「やどり取り給ふ  
や」なぞ問ひ聞く。「知りたる宿り  
あり。かしてへ」なぞいへど、猶  
追ひ来て、「彼處はま廣けれど、人  
ゐこみて、所せう侍り。我が家さ  
さやかなれど、相宿りの人もなし。  
疊、夜のものも、皆清らにしれき  
て侍り。」なぞさまざまにこしらへ

つて寝つたものか。催馬樂貫河にも「親放る夫は、まし  
てるはしも。然しあらば、矢矧の市に履買ひに行ん。」と  
ある。

○所せう 所狭くの音便で、窮屈な事をいふ。宿引とい  
ふ者の、うるさく客を引く様子が見ゆる。

言ふ。初めはいなみぬる人も、す  
かしせめらるゝにしわびて、しづ

しづに引かれつゝ行くもをかし。

軒の端に菅笠高くかけ置きた

るは、ねくらかしたる友を待つま  
じるしどぞ見ぬし。これらは皆伊  
勢の濱萩をりふせて、旅寝せむと  
出でたちし、神まうでの人にぞあ  
りける。

湯あみんどにや、はだかつるは  
ぎにて、三四人引きつれて、湯屋

○いぶく 今の俗語ではない、源氏字津保などの物語  
にもある。

○伊勢の濱萩 萬葉集四に「神風や伊勢の濱萩をりふせ  
て旅寐やすらむ荒き濱邊に」とある。新古今集にも載つ  
てゐる。

○はだかつるはぎ 雅言集覽に字津保藏開卷の詞として  
引いてゐるが、はだかは肌赤で、つるはきは襦を高くか  
かけて、腰を顯はしてゐる事、鶴腰の意だ。金葉集の連



たづねまよふをかし。すべて

あまさかるひな人にしわれれば、家

にありては粟ひねなどをのみ食ひ

ものとはすめり。さるをよくしら

げたる米の、いひけにもりて食ふ。

椎の葉にもるとよみしには、さま

かはれる旅の宿りなり。

奥まりたる方に居るは、京人に

や。長き旅路に色黒みたれど、さ

すがに其のきは見わた、なだらか

にもてなしつゝ、日記のやうなる

歌に「鴨川を鶴ほぎにてもわたるかな」さあるので能く知られる。

○ゆや 是れも古い語で、和名抄に「浴室、俗云、山夜、さある。平治物語に、温泉の湯場を湯屋ともある。但し爰は錢湯風呂の事にいつたのだ。

○椎の葉にもる 萬葉集二「家」にありて箆に盛る飯を草枕旅にしあれば椎の葉にもる」箆は梳の類。

○其のきは 人品のよい事をいふ。きはは際(さい)の字で、其身の分際さいふに同した。

○なだらか 源氏桐壺藤木などにある所を考へて見る

ものどう出てよみなぞす。旅はい

もころ」なぞうち誦しぬるもゆか

しげなり。

どの方に、女ぞち七八人、老い

たる若きうち交りて、足ひきなが

ら入り來ぬ。あるじ「いづこより

か」と問へば、「こよろぎの磯近き

わたりより」といらふ。「さらばみ

肴どりに、わかめかりあげてむ」

と立つを、さる物はねぎ侍らず。

玉だれの中はかしこし。人け遠く

に、長足るらかの意で、優長なこまになる。

○もてなし 昔のつかひ方は、其の人の身をもてなす様をいふので、餘所からもてなす事ではない。舉動さいふにあたる。

○日記 旅日記、道中案内のこと。

○旅は妹こそ 風雅集十三に、願しらす貫之として「歸る雁我が言つてよ草枕旅は妹こそ戀しかりけれ」とある。

○こよろぎ 磯の枕詞にいふが、全體、磯や洲崎は、小波の寄せ返る度に、小磯のゆるぎ捨くものだから、磯の枕詞にいふのである。こは接頭語。よろぎはユルギの轉

と見るがよい。相模國の餘綾郡も、大磯小磯のあたりから出た名である。借爰は東海道大磯宿近邊から来たといふのを、風俗歌の詞でかいたのだ。

○かさかなどりに 風俗歌に「玉だれの小瓶を中にするて、あるじはもや、肴まぎに肴どりに、こよろぎの磯の



だにあらば、こもすだれの中にすゑ給ひても、」とうち笑ひていふ。ゐなかびたれど、さすがにつつましう、うちしのびて、たみたる聲人にきかせじとにや。こどすくなにもてなしつゝ、さし出でたる盥タラヒに足さし入れて洗ふ。

調度めく物は、包みにつゝみて、馬にねはせつるを、すさはこれに乗りてくれ來つ。何事にかあらむ、れり下さまに馬ひきたる男とあ

らうひて、のゝしり騒ぐ。若き人は、あされて手まどひしつゝ、皆逃げて入りぬ。めのとにや、れど老成なしき女の出で來て、すさが手をどらへて、「人わろし。物ないひろ。」と制して奥さまへゐてゆく。「都人の思ひいはむも恥づかし。旅の空にて、かゝる心はつかふものか。ようせずば、かの男に打たれやせまし。あさまし。」とてくらぐすさをあはめ責む。口付クチツキの男は、あ

わかめ刈りあげに、わかめかり上げに」とある。先づ大磯から来たといふので、ドリヤ御者の歩度なましよう。いや御馳走は入らない。よい御座敷(玉だれ)にも及ばぬから、あたり静かな離れ座敷において貰いたい」といふ意である。  
○つゝまい、恥かしさうに。  
○たみたる、拾遺集、物名、細螺「あづまにて養はれたる人の子はしたたみててこそ物はいひけれ」とあるは、舌挽みの約だらう。雅言集覽に、言ノナマルヲ云とあるが、其の下に引いた白氏文集の詩に、迂の字をタミタリとあるも、迂は曲る義もあるから、矢張挽む意で訓んだものと思ふ。シタタミと熟語になる時、濁るのはよからうが、タミ詞といふにも、濁るのは疑はしい。

○おさなき、老女らしき者をいふ又家長をいふこともあるおさはガホト(大人)の略語だといふ説さへある。  
○人わろし、源氏桐つぼにも笹木にもある詞で、人見わろい恥づかしいことである。  
○心つかふ、竹取物語「たけき心つかふ人」とあり、源氏若菜にも「人さきじろひ猜む心つかひ給ふ」などがある。古いひやうで、爰は従者と馬丁と、賃錢の事で評ふ所をかいたのだ。○あはれも源氏笹木にある詞で、古注疎み悪む意だとしてある。  
○あし、錢のこと、前に委しくいった。  
○ふかまけて、源氏、落窪、今昔等の物語にある詞で、先輩の説、笑ミ設ケとある、音海などにも、思ヒ設ケテ笑ムと譯してあるが、萬葉十九の長歌に、細眉根ホソキメノネ咲麻我理エマガリ、また發心集三に「口は耳もさまで笑みまけて」



し思ふ様に得て、笑みまけて、馬ひきて歸るうしろでもにくしや。

一間なる方に、鬚れひ肥れて、

まぶしつべたましき男ひとり、もろ手組み、かしらうち傾けて、壁に

むかひ居り。問はず語りするを聞

けば、「己れもとより家乏しくて、

さきに隣なる主に、こゝらのこが

ね借り出でたれど、たゞ朝霜の日

にむかひたるやうに、時のまに失

せにたり。返すべき期もよく知り

ぬれど、もたらねばいかにせむ。

唯彼の人の死にもやすると、ほか

なきあいなたのみにひきしろひ

て、年ごろを過ぎし來ぬ。さるを

こたび村長のあつかひ物すとて、

いたく己れをせめさいなみて、今

年の程に、此のこがね残りなく返

しやりねど、いひねきてたるがこ

どわりなき。此のこがね、もと村

長の貸し興へつるにもあらぬを、

しかばかり腹立ちいふなるは、い

などの例を思ふき、笑ふ時眉なり口なり、曲がつて見ゆる事と思はれる。

○うしろで、後、姿、枕草子、むさくなるもの、條に、相撲のまけて入るうしろで、こもある。後津邊の約語。

○まぶしつべたましき、源氏柏木巻に、此の聖もたけ高

やかに、まぶしつべたましきて、荒らかにおどろくしく

陀羅尼よむを、いであなにくや」とあるが、孟津抄に、

まぶしは目なりとあり、細流抄には、つべくしきなど

いへる詞也。おそろしき心也とある。いかさま前後の文

を見るに、怖ろしき意。盛衰記十二、一院籠居の所に、

「國々より駆上りたる夷どもなれば、いかでか御覽じ知ら

せ給ふべき。つべたましげなる顔氣色、疎ましげなる事

様なり。」とも見ゆる。

○あいなたのみ、あいの假名アヒミとかくがよい。愛ナシと云ふとは別で、是は無敵の轉つた語だといふ。頼ミがヒノナイといふ意だ。

○おきて、おきては、俗に捷の字をかく。取り極めると譯するがよい。



かなることにか。村長もし恵みの  
心あらば、隣の人をいさめて、  
も<sup>可</sup>とせ千とせ過ぎむまでも、な  
だらかに待ちてあれ。ところいふ  
べけれ」と、頭をうちふりつゝつぶ  
やく。

高殿のかたに、かやくと人の  
聲するは、越<sup>コシ</sup>の國人なるべし。三四  
人つぎひて、酒のみあろびて、い  
たく酔ひや進みけむ。からき聲し  
ぼり出でてうたふ。それが中に若

○かやく、今かやくといふに同じだが、源氏やこり  
木の巻に、御隨身もかやくといふを制し給ひ」とあ  
るから近世の俗語ではない。

き男のたちあがり、扇とりてすじ  
りもじり舞ひ踊る。其の歌は、かし  
この國ぶりなりけり。

酒をたうべつ

五さくの酒を

一合たうべて

酔ひいやましぬ

などうたふ。猶あかすや皆立ちて  
舞ふ。

盆の十三日に

舞人は揃ひつ

○すぢりもぢり、半治拾遺物語一の鬼にこぶさらるゝ  
話の所に、翁の舞ふを形容して、(徒然草にも)すぢりし  
ぢりさある、筋を活かした語かともいふが、兎に角、身  
をねぢり曲けて、可笑しき姿をする事さ見ゆる。

○酒をたうべつ、今も越後の盆踊にうたふ。「酔うたよた  
よた五勺の酒に、一合飲んだらなほ<sup>酔</sup>だる」(今よかるさ  
詠る)といふを、今様歌の句法に釋したのである。

○盆の十三日に、踊り子かそつた稻の出穂よりまだ揃  
つた」今も此の通りにうたつてあるといふ。



稻の穂よりも

いとよく揃ひつ

拍子  
はうしどるたびに、「やどせのせ」

どうちはやしつ、手うつさま、ひ

なびたるものから、物見しらぬ目

には、珍らしく興ありてをかし。

こなたになみゐてゆふけ食ふ人

は、信濃の國の人とか。大きな

まりにいひ高うもりたる、さなが

ら越の白山を、をしきの上になつ

しすゑたるやうなり。あつものゝ

○まり、枕マクの古語

○越の白山、枕草子、雪の山をつくつた所にある。中古の京人は、高く白いものを、よく是れに喩へてゐる。

○をしき、折敷マクとかく。今いふ盆の類である。

汁一口にすゝりて、あはせの魚か  
しらも骨ものこりなくくひ盡しつ。

さていへらく、「腹をうこなひで、

目ごろになり侍り。こゝちあしけ

れば、自然にいひはむもうまくも

あらず。こよひ唯ままりに五つばか

りをたうべぬ。かばかりにては、

いと心細しや」とて、ふし目にな

りていふ。かゝる人の心ゆくばか

り物せば、いかばかりの飯をや

はまし。いと恐ろし。

○あはせ、枕草子、工匠の物食ふ様をいいて、飯より先にあはせを物食ふとある。飯に合せて食ふべき物だから、あはせといふので、菜の事である。

○はらなそこない、川柳風の狂句に「信濃ものまごそわ  
るいか五杯食ひ」といつたわる口をさつたのだ。

○ふし目、下を向いて、陰氣な顔をする事、源氏物語な  
ぎにもある。



隔てたる障子のあなたにをるは、  
 衣手の常陸人なり。うちゆがみたる聲して、さへづりいへるは、「今晩な、いたくこうじにたり。なでふにもかでふにも、すねいたく動くべうもわらず。さちうべりて聞ぬむ。ゆるしめせ」とて、はしごまに寄りて臥しつ。とばかり有りて、ついできあがりて、目を大きになして、いかづちの落ちかゝるばかりの聲して、「大事をなむ忘れにた

○衣手の、衣手は袖(衣手)と同しで、昔の袖には襷積をこつたと見ゆて、ヒダといふ詞の類につき、常陸といふにも、枕詞として萬葉集などにつかはれてゐる。

○そべりて、滑りてを訛つたのだ。脚の立ちごを失つて轉ぶ事から、寐る事にもいふ。

○ゆるしめせ、狂言などにもいふ。免しめされの約束つたのだ。

る。某のすくにて慰ひし時、うるまの芋ねのく二つ宛もどめて食ひたりき。ろは己れ錢をかへれきつ。すがくどれこしめせ」と、いふく寝たる人をさへれそす。「あすころ物せめ。ねふたきに」どわぶれど、えしもゆるさで、うち促るもなさげなげなり。

程なく無縁寺の鐘聞ゆるは、亥の時にや。れのくうちやすみたりけむ、音せずなりぬ。疲れし晝の

○うるまのい、狭衣物語や、千載集の歌などにも、うるまの島といふがある。和訓栞に、之を琉球の事だといてあるから、薩摩芋の事を、かう書いたのだ。半日閑話に甘藷は元禄年中琉球から薩摩にわたつて弘まつた。とある。座塚談には、寶永元年薩摩を経て長崎に種をわたしたとある。今でも薩摩では、琉球芋といふそうだ。此のあたりは、下等な宿屋に泊つてゐる、田舎の下種の、それらの習癖をかき列れたのだ。

○すがく、直々の轉語で。雅語譯解にテキパキ、サツソクと譯してある。

○無縁寺、兩國橋東詰の回向院の事で、此の寺はもと、明暦三年正月、江戸の大火に焼死した多くの死骸を、此地に埋めて、一堆の無縁塚を築いたに始まる。仍て昔は諸宗山無縁寺といつたといふから、古い方の寺名をかいたのであらう。



なごり夜一よ大どれたる聲して、  
 寢言ネコトとか、かたみにのゝしるもけ  
 うとく、例はかしがましと聞きつ  
 る壁の中のきりくすさへ、けれ  
 されたるにや、音たてぬ様なり。  
 明くれば朝アサアサアサとくしたゝめて、れ  
 のかじし心々に行きわかるめり。  
 げにいづれかさしてと思ふにも、  
 旅ばかりあはれにをかしき物は又  
 わらじ、はや。もろこし人の辭に、  
 天地は旅の宿りなり。ゆきかふ月

○おほどれたる 源氏東屋に「大路近き所に、おほどれ  
 たる聲して」とある。又枕草子に、「冬の末薄のおほどれ  
 たる」さもかいてある。彼れ是れ取りあはせて考へるに、  
 俗にシツカリセマ、締りのない、事と思はれる。  
 ○けりさく 中古の草子に多い詞だ。氣疎くて、俗にイ  
 ヤニナルさ云ふ詞にあたる。懐かしいの反對で、物すごい  
 意にもなる。  
 ○壁の中のきりくす 源氏夕顔に、詩經の語からとつ  
 て、「壁の中のきりくすさへ、聞達に聞きなされ給へ  
 る。」とかいてある。中古きりくすといつたのは、今の  
 蟋蟀セキソウ（こほろぎ）の事。  
 ○いづれかさして 古今集「世の中はいづれかさして我  
 ならむゆきさまるなぞ宿と定むる」源氏の夕顔にも引い  
 てある。

○天地は旅の宿り 李白の春夜宴桃李園序に、夫天地者

日はたび人の如しといへり。

萬物之逆旅、光陰者百代之過客、而浮生若夢とある。

されば生れに生れたる人、誰れ  
 かはど常々こしなへに此の宿りにとい  
 まりをらむ。浮世は夢に似たり。よ  
 うなき實に心を掛けて、草枕旅寢の  
 まどより、浮びたる雲をのぞまむ  
 は、いとくゝれるかなる心にころ  
 と、其の夜宿りし山伏法師の、うち  
 繋みつゝ語りたるを聞きて、深き  
 心のゆゑよしは知らねど、げにと  
 目覺むるこゝちころせられしか。

○浮びたる雲 論語述而篇に、不義にして富貴なるを、  
 浮雲の如しといはれた故事。

○繋む 痛歎する體、俗語には眉に八の字をかくといふ。  
 ○深き心 山伏がいふ言の深き意味手細は分らぬが、成  
 程尤もさは聞えるといふ意で、目覺むるは悟る事につ  
 て、旅寢、夢などの縁語でかいたのだ。



やくし堂

いづこも同じなご續けたりし  
 は、片山寺のかごかなる所にてこ  
 ろよみたれ。玉敷ける都のうちには、  
 なべて所せう人のゆきかひ賑はし  
 うて、秋とだに知らぬ人も多かり。  
 女ごち折にあひたる色の綾うす  
 もの、たのがじし好きごころに任  
 せてさうぎきつゝ、男がたも今様  
 のひとへ衣うるはしう着なし、扇

どりて夕暮れろしと待ちどりつゝ  
 出で立つ。下つかたはどりあへた  
 るまゝのゆかたびらに、帯しどけ  
 なげにひき結び、老いたる若さう  
 ちまじりて、道ざりあへぬまで押  
 し合ひつゝ行く。何しに斯うはど  
 思ひめぐらすに、鎧のわたり近き  
 所にははする薬師佛をがまむと  
 て、行き集ふなりけり。人ごどに勇  
 み立ちて、ろいろに思ひなげなる  
 ねももちなれば、ありわづらふ人

○薬師堂 南茅場町にあつて、毎月八日十二日の縁日は  
 餘程賑はつたものださといふ。尤も元祿の頃までは、此  
 邊まだ至つて閑静な地で、萩生徂徠や、晋子其角などい  
 ふ學者詞宗も住んでゐた所であつたさ、舊い記録にかい  
 てある。

○いづこも同じ 後拾遺集五に、真蓮法師「淋しさに宿  
 を立ち出でてながむればいづこも同じ秋の夕暮

○かこか 源氏夕顔に、東山の尼寺の所を「あたりは人  
 繁きやうなれど、いさかこかに侍り」とある。河海の註  
 に、四圍さしいふ四方を圍む心さなりさある。

○玉敷ける 長明方丈記に「玉敷の都」さつて、枕詞  
 の様につかつてゐる。畢竟玉を敷いた様に、美しいとい  
 ふ意だ。

○さうぞき 装束の字音語を、國語の法に活かさせて、  
 さうぞき、さうぞく、さしいつたのである。

○さりあへたる 珍らしい詞づかひに聞ゆるが、例の出  
 據は源氏松風、胡蝶等にあるのを、雅言集覽にも引いて  
 ある。俗にあり合せのまゝといふ詞に同じである。

○鎧のわたり 維新後まで渡船で通つてゐたが、今は鐵  
 の釣橋を架けて、名も元のまゝ、鎧橋といつてゐる。紫の  
 一本や、江戸鹿子などいふ古書に、將門の甲冑を置いた  
 所で、傍の地に甲山といふもあつたなご、物々しくか  
 いてあり、江戸名所圖會に、兜塚といふも、同所牧野家  
 の庭中にあつたと見てゐる。是れは昔、此邊に兜の形  
 に似た小山があつて、それを兜塚といつた所から、近い



どしも見ぬぬを、御佛たのみて、何事の祈りするにかとをかし。こゝに海賊の橋といふあり。其之に見せましかば、わたりもはてず逃げなましとをかし。されど静けき御代とて、聊かの白波だに立ちわたらぬがたふときや。橋より南ざまに折れゆけば、いづこの野山よりもて來にけむ。さまざまの木草數しらす並べたきて商ふ。こゝらある中にも、九日を待ちあへで

渡を紐さつたのであらう。  
○ありわづらふ 俗に生活の困難なることだが。此の詞の出處は、今物語に小大進の歌として、「南無薬師あはれみ給へ世の中にありわづらふも同じ病ぞ」とある。之を源平盛衰記に、待宵小侍従の歌として、結句「病ならずや」としたのは、記者が暗記の誤だらうが、ごちらにしても、本文薬師の縁日だから、「南無薬師」の歌の詞をとつて、得意然たる顔色で、薬師如來に、生活難を訴へそうにも見ぬぬ。さかいたのだ。何と手の利いたやりかたではないか。

○海賊の橋 今改めて海運橋と稱へてある。江戸砂子に「昔東詰に海賊御奉行向井將監殿の屋敷あり」と記してある通り、海賊衆といふ役人の邸に沿うた橋ゆゑ、海賊橋といつた。後、向井の邸は他に移り、海賊衆といふも稱呼が悪るので、御船手頭と改まつなが、橋の名は元の通りに稱へ來つた。  
○貫之に云々 土佐日記に、海賊を恐れる記事があるか

咲き出でたる菊の花、うち見るより老いも忘れつべきこちぢずる。又夏にわくわく咲き出でたるも猶多かり。  
くさのかう、きちかう、りうたん、しをに、くたに、さうびなど、いづれか優り劣りやはある。されど昔より物の名にのみいひつけつ、其のさまをけしようによみ出でぬがはいなき。かき數ふれば七種の花ぞ、殊に見所は多き。藤袴

らそれをいつたのだ。  
○白波 後漢の時、西河の白波谷に賊軍の籠つた故事から、盜賊の異稱となつたのを、國語にシラナミと訓んで、矢張盜賊の事に用ひてある。  
○九日を 菊は重陽に咲きあふを賞翫するので、拾遺集四に、躬恒「長月の九日ごこにつむ菊の花のかひなく老いにけるかな」とよんだ歌もある。  
○老いも忘れ 六帖に「昔人の老を忘るといふ菊は百とせをふる花にぞ有りける」とある歌によつてある。  
○くさのかう 和名抄に「芸、香草也、久佐乃香」と見える。古名録には、大芥の事だともある。縦其の物は何でもあれ。此處は古今著聞集十九に、天祿三年八月廿八日、規子内親王、野宮にて御前の面に、薄、藤袴、紫苑、草香、女郎花、萩などを植ゑさせ給て、松蟲、鈴蟲を放たせ給ひけり」とある邊を、下に含んで書いたものと思はれる。  
○きちかう 桔梗、今キケウといふ。古今集物名に、桔梗を、あきちかう野はなりにけり云々ともあるのでいよ



の匂ひたちあがりたるは、常ざま  
の花にも似ず、誰が佩きものにや  
すらむといとゆかし。あるは古枝  
に咲ける萩の花、もとの心はかう  
もわらまほしと思はる。又朝顔を  
根ぞめにうつして、盛り久しかれ  
など祝ふもとりづくにをかし。高  
やかに咲きみだれたる女郎花を、  
人々集ひつゝ競ひ買ふ。あなかし  
がましとひとりるみずせらるゝ。  
姫百合、撫子などは人めきたる名

く桔梗をきちかうといつた證なる。  
○くだに 源氏少女卷に「昔覺ゆる花橘、撫子、さうび、  
くだになごやうの花の、くさく植ゑて、春秋の本草其  
の中にうちまぜたり」とあつて、傍注に「昔丹さかいてあ  
る。古今集物名にも、くだにといふがあつて、舊説には、  
牡丹の事だの、龍膽の異名だのといふが、實は何だか知  
れぬ。昔の類だなどといふは、彌々信じ難い。それ故翁  
も本文に、物の名にのみいひつけつゝ、其のさまを顯に  
よみ出でぬと逃げて書いてある。  
○けしやう 顯證の字音、佛典の語で明白の意。  
○かき敷ふれば 萬葉集八、「秋の野に咲きたる花をか  
ゆび折りかき敷ふれば七くさの花。  
○佩きいの 風原の離騷に、級三秋關一以爲佩。さある故  
事によつたので、匂ひたち上るさいふ所から、君子の帶さ  
なるかさやうにいつたのだ。和名抄に、蘭、和名本草曰、  
布知波賀萬さあるから。  
○古枝に咲ける 六帖「秋萩の古枝に咲ける花見ればも

なるを、犬蓼、ゑのこ草としも名  
つけたるは、いかに思ひくたした  
るにか。鳳仙花、鶏頭草などは、  
名のみにしもあらず、かたちさへ  
此の國の物ともればぬす。  
ろも秋好む宮の御前はいかなり  
けむ。遍昭が庭の作りざまはいふ  
にも足らじ。嵯峨の大堰のわたり  
は、未だ行ききたらざれば知らず。  
あたり近き武藏野の原といふとも  
げにけれされつべき秋の色なり。

この心はかはらざりけり。  
○朝がほを根こめに 鉢植の朝顔を買つて来て、毎朝花  
の咲き替るのを樂しみ、いつまでもながめようといふ意  
をかいたので、後水尾院の御製に、「朝顔はあさなくに  
さきかへて盛久しきものにぞありける」といふが御集に  
あつて、人口に膾炙する、此の盛久しの詞をさつたのだ  
らう。  
○あなかしがまし 古今集俳諧に「秋の野になまめきた  
てる女郎花あなかしがまし花も一さき」此歌の詞をさつ  
て、女郎花を買ふものゝ、集つて騒がしくいひ罵る状を  
いつたのだ。  
○ゑのこ草 和名抄に「狗尾草、惠奴乃古久散とあつて、  
犬の子さいふ草だから、下文にいかに思ひくたしたるに  
かき書いたのだ。此の邊はすべて枕草子にならつて書い  
てある。句毎にをかしさいふ詞の重なるのもうらさいや  
うだが、枕草子の文勢である。  
○思ひくたし くだしは枴々で、今俗クサスといふ詞



うしろの方に、大きな松を根こし來たるが、さかしらに高砂の松どかいてさげたり。けふしも知らぬ人に引きとられて、誰れをかも知る人にとをかし。其のはか竹、かへ、ひらぎなど、常磐木の限り並べ置きたる、やうくさまざまにて、幾ろたび見廻らふもわかぬこちす。

又かたへに少なき籠をいろどりろれにくさぐさの蟲を入れて賣

だ。下すではない。

○秋好む宮、源氏物語に出てある事だが、此宮は六條御息所の御女で、時の帝の中后に立ち給うた。秋の景色を好み給ふさいふので、此の名がある。源氏六條院を造營し、其の未申の方を、宮の御所と定め、秋に成つて移轉のある事、御庭を面白く作つた事などが、少女卷にある。○暹昭が庭、古今集四に、仁和の帝、みこにておぼしましける時、布留の瀧御覽せむとておぼしましける道に、暹昭が母の家に宿り給へりける時、庭を秋の野に作りて、御物語のついでによりて奉りけるさいふ歌の端書がある。此の事をさすのだ。

○根こし、古事記窟戸の段に、「天の香具山の五百箇の眞榊を根こしにこじて」とあるより外にはない詞で、語法家のやかましい論もあるが、根起しの略語で、根から掘り起すさいふだけの事とすればよくわかる。

○誰れをかい、知る人にせむ高砂の松も昔の友ならなくに「古今にある。誰れに買はれて、誰れをなじみの友にす

る。いなごまろ、はたぐ、松蟲、鈴

蟲、猶こいらの蟲あめる、ひとしく競ひ鳴く。すいしもてはれる箱

に、螢あまたあつめたるを見ては、

色好みの家のすさみもかゝりけむ。から國の何某が窓やいかなり

し。なごいふもあり。蟲のしや尻に火のつきてと、のしり通るは、

よからぬ人どころ推し量らるれ。どかくする程に日も暮れぬ。急

き御堂に詣でて懸に伏し拜みてれ

るかき、洒落たのだ。

○いなごまろ、和名抄に蛭蟻とある。今のいなごさいふ蟲の古名。

○はたぐ、同抄に、蟻蛭、俗にガチャク、バツメのこと。○すい、古くは生刺さかく。若用して軽く涼しいから

いふ名だ。當時淺綾の事になる。○螢あまた、集めた故事は、源氏螢卷に、兵部卿、玉葛

の姫君の許へ忍んで來た時、源氏が豫て螢を多く集めて、几帳の帷につゝみ置いたのを、帷を引き直して、わざと螢を飛ばし、其の光で玉葛の容を、兵部卿に見せる

やうに仕組んだ物語の意をかけたのだ。○から國の、晉の車胤、螢を練瀼に盛つて、書を讀んだ

さいふ故事、蒙求などにもある。○蟲のしやしり、宇治拾遺物語に、貫之が戯れに東人の

口氣を學んで、螢を詠んださいふ歌に「あな照りや蟲のしや尻に火のつきて小人魂とも見えわたるかな」と出て

ある。しや尻さいふ所などが、當時の坂東もの、語氣を



りつ。御くるわ近きわたりにては、此の御佛を置き奉りては、薬研堀といふ所に立たせればする不動尊、さては白銀の町にまします観世音、この三どころを参りつどふ人も多く、また植ゑものなどあきなふ人も共にひとしく覺ゆる。げに遙かなる野山の草木を、一つ所に集め見むは、ひとの國にてはいとも難き事なるを、何事につけても、事足らひぬる都のさまが、かたじけなきわざにはわりける。

うつしたのだ。偕こんな田舎訛りの下衆な詞をつかふは、賤しい身分の者を推し量られるといふ意だ。  
○御くるわ 江戸城郭の事で、其の中郭の東門、吳服橋御門から、茅場町へは、東の方十町ばかりの所で、此處より北島町八丁堀へかけて、當時は町與力の邸多く、身分ある町人なども、數に於いて今より多かつた所だから、其の股賑豪奢な風は實に思ひやられる。

○ひとの國 源氏帚木卷に「受領といひて、人の國の事にかゝづらひ」とある釋に、人の國とは、京ならぬ他國の事、云々ある通り、昔は日本以外の國にいふ事は少ない。

337314

◎都のてぶりは、以上の外にまだ一篇あるが、事柄が面白からぬから、省いて四篇だけに止めた。其の代りに、「梅が枝物語」を以て補ふ事にする。是れは翁自づから頭書を加へて、文化七年に開版した書だが、世間に少ない本で、「都のてぶり」よりは、却つて珍らしいとも云はれてゐる。其の上、淨瑠璃文を古體の物語文に翻譯したのだから、前の四篇とは、又趣きが變つて興があらう。



此の梅が枝物語は、原書の末に、

相模の國よりかへさに、神奈川といへる驛路にとまりたるに、物語らふべき人しなれば、つれづれと燈火かゝげをるもさうづしうて、「讀む可き書あらば貸し與へてよ」と請ひたるに、「かゝる物侍り」とてもて來ぬ。

「こは耳なれにたれば、讀むべうも覺ぬねば、さてうちれきつ。されど、うちも寐られねば、筆とう出で、かのうたひものゝさまを、物語文のやうに書きやり見たるなり。唯故郷に待ちつけ居たらむ女子へのつとにもせまく、且は旅路のこゝろやりにもとて、ちびたる筆して書いつけたるになむ。

六 樹 園

とある通り、旅亭に於て、一夜に「ひら假名盛衰記」といふ淨瑠璃本の、梅が枝無間の鐘の段を、古體の物語文に翻譯したのである。此の淨瑠璃は、操(人形)



芝居のために出来た義太夫節の淨瑠璃で、竹田出雲、文耕堂、三好松洛等數人の合作であるが、元は歌舞妓芝居の方から出たのだといつて、歌舞妓年代記卷の二に、かういふ事が出てゐる。

享保十六年春、中村座「けいせい福引名護屋」云々(瀬川)菊之丞傾城かつらぎにて、無間の鐘の狂言始めて勤むる。誠に古今の大當りなり。○無間の鐘の事、遠江國佐屋郡西山村に、無間山觀音寺の釣鐘を撞けば、未來は無間地獄にねつると雖も、此世にては富貴の身となるといへる事を、狂言に取組み、元祿二己年大坂荒木與次兵衛座にて、「傾城小夜の中山」といふ名題に、谷島主水といふ若女形、傾城うばらにて鐘をつく所作、始めなり。其後元祖芳澤あやめ、京都早雲座にて鐘をつく。其時の所作は、水木辰之助すなはち元祿十四年の事なり。又享保十三年春、京、市山助五郎座にて、

瀬川菊之丞、庄屋六右衛門娘ねますにて勤むる。此時趣向をかへ、手水鉢を鐘にながらへて打ちしが、始なりといふ。同十六年亥春、中村座にて、かつらぎにて勤むる。初日舞臺にて、金をつゝむ物なき故、衣裳の袖を誠に引切りたりし、其思入よかりしゆゑ、翌日より其通りにせしとかや。其後大坂竹本筑後掾座にて、元文四年未四月十一日「ひら假名盛衰記」といふ新淨瑠璃初日なり。是れ「福引名護屋」の菊之丞の無間の鐘を取組み、淨瑠璃の文句にも、袖引きちぎり三百兩、つゝむに餘る喜び涙、とある事、瀬川家の藝、代々のほまれなり。

無間の鐘の傳説は、人口に膾炙してゐる上、演劇の方に、かういふ來歴もあり、又操劇アヤツリの盛衰記をも、歌舞妓役者の方で度々演じて、童謡にまで成つてゐる位だから、當時は誰れも知つた事で、翁も「耳なれにたればといつて、わざと之



を例の和文に譯したのであらう。今日てば無間の鐘なきいふ舊劇は、流行せぬから、淨瑠璃の本文を出して註脚に代へた。讀み比べて御覽じろ。しかし物語の方は體が體だから、文が自然長くなり、詞も耳遠くて、今の人には、淨瑠璃文の方が簡明で分りよからう。翁の手腕でも、時勢には勝たれぬ。今日和文の行はれぬも、致し方がない。

梅が枝物語

あそび 和名抄遊  
 女楊氏遊  
 語抄云遊  
 行女兒和  
 名字加禮  
 女又云阿  
 曾比

れしてゐる浪花のわたりは、四方の國々の船  
 つどふ所にて、あろびどか名のりする者い  
 と多かる中に、神崎の里なる千歳の何某が  
 宿なむ、わきて賑はしく、晝よるをいは  
 ず酔ひ亂れて、うちあげ遊ぶ人絶えざりけ  
 る。今宵とりわきてやごとなき人わたらせ  
 給ふとて、家あるじうるはしう袴着よろひ、  
 まらうどぬのうちと掃き拭はす。女ばらは  
 あかねの布腰にひきゆひて、立ち走るさま、

平假名 盛衰記 梅が枝無間の段

爰も名高き難波津に、戀の船つき  
 數々の、多かる中に取り分けて、  
 酒くみ交す神崎の、里の色宿千年  
 やは、客に絶え間もなかりける。  
 殊に今宵は晴の御客と、書院座敷  
 のはき掃除、亭主が袴、中居が揃  
 への紅も、園生に植ゑて隠れなき、  
 大名客の御入と、表の方賑はしく、  
 人目を忍ぶ旅乗物、ね供まはりも



かるくと、追從輕薄切聲の、切戸口より直に昇き込む奥座敷、梅が枝様へ人走らせ、ろれれ菓子、たばこ盆、釜をたぎらす音羽山、馳走ぶりとぞ見ぬにける。

地火拾遺  
宇治拾遺  
小右記後  
三年記續  
古事談見  
に事見ゆ

いとくすいろぎたるけはひきもなり。まことや紅の花を園生に植うともかくろへざる色なれ。深うやつし給へれど、誰れかは常さまの人としも見奉らむ。どのかたに人あまた聲して、興ながら昇き入る。「悲より待ちつけ参らせし」などつゝゐらうして、中門の戸押しあけ、奥まりたる方のねましに入れ奉る。「梅が枝の君にとく告げてん。まづ菓物参らせよ。大御酒御肴とく」など聲高うのしる。地火爐の湯たぎらす音など、さながら松ふく風にかよひて、心ゆける設けのさまなり。

みやま木  
源氏紅葉  
賀の巻に  
花のたに  
はらのミ  
やま木な  
古今戀四

庭にはさざらぎの梅の風まぢ顔なるが、さど吹く度毎に、雪みぐれの色にまがへるなどは、はねあむ夕暮の木のもとなり。梅が枝の君といへるは、しよしの別當の北の方に宮仕せし女房にてありけるが、心づからの忍びわざより彼處を逐ひやはられて、かう爰にさすらへて、遊女に身をかへてけるなり。げに此のひともの薫りいみじう、同じつらなるも皆けれされて、ねたき事に思へる深山木も多かりけり。偽りのなき世な

雪やみぐれや花ちる嵐、かはい男に偽りなくは、本の心であはち島、千鳥も今は此の里へ、身をば賣られてやり梅の、名も梅が枝の突き出しには、名木ならぶ方もなく、千年がもとに入り來たる。亭主立ち出で、「れうい」梅が枝様、けふのね客は東國のさるれ大名、初対面から身請の相談、箱入の駿河小判、すつしりとしたれさばき、



いづはり  
なせは  
いかに  
り人の  
さりの  
まれの  
まし

りせばなど、うち誦し入り来るさま、こよ  
なう愛敬づきたり。あるじ「いかなるにか、  
遅くわたり給ひし。今宵のまらうとぞねこ  
ろ、東國にてやごとなき國の守にはわなれ。  
けふの見参すぐして、やがて迎へとり給は  
むとて、れもとのたけばかりに、黄金つみ  
並べて、とくより待たせ給へり。はやわた  
り給ひねかし。」とはやりかにいふもにく  
し。「東國どのたまふ、其のまらうとの面持、  
もしははたばかりにて、ふくよかに鬚が  
ちに、色黒き人にははせせず」と問へば、

八  
サア〜奥へ」と云ひければ、「東  
國どれしやんす、其の客の年ばい、  
廿ばかりでてつくりと、色の黒い  
髭男かへ。「けもないこと、〜」  
「うれで心が落ちついた。わたしも  
爰に待ちあはせ、逢はねばならぬ  
人がある。「れつと合點、ろこは  
我れらが請け込み、禿衆で座敷を  
くろめん。れ前の御用は彼のふか  
まの源太様に、「あひの襖れ引き立  
ててころ入りにけれ。」しやほんに

鹿島樂  
いで我駒  
はやくゆ  
きませま

「いな、さる様の人にははせせず」といらふ。  
「さらばあが心も落ちぬぬ。されど暫しこゝ  
にありて、物語らふべき人あなれば、さる心  
したまへ」といふに、「其の事よく知りて侍  
り。何某うけひき侍れば、彼處はわらはに  
譲りて物せん。まちつけ給へらむ人ころ、  
忍び男と名高かる源太の君にははれはすら  
め」など云ひつゝ、さうじ押しあけて入り  
ぬ。「あなかたは。心も知らぬ人の仲だち顔  
よ。さばれ、ぬしはいかに賤し給ひし。た  
ろがれにわらたせ給ひねと、鹿島の里まで

九  
何じやの、此の梅が枝が心もしら  
ず、身請くと取持ちがはいやら  
しい。うれはさうと源太様、暮方  
から御越なされと、香島まで文や  
つたに、なせ遅い事じやまで、早  
う逢いたや。顔見たや。「逢はいと  
うして、かうしてと、たばこ引き  
よせ、胸の思ひは日に千度。



つち山ま  
な行きて  
早見ん

六帖  
なれぬ身  
かきよも  
いかにせ  
そんけに  
みならず  
みならず

せうろこしつるに、待乳山とも思ひやらせ  
給はずや。見奉らばとやせまし。かくやせ  
まし。」など思ひ亂れつゝ、煙草どうでて  
くゆらすさま「水ならぬ身は」ともいはまほ  
しげなり。

男はよがれせずかゝづらふに、今宵も例の  
ごと、うち忍びて來たり。裝束より始めて、  
よろづきよらを盡せる。はをり頭巾など  
いへるものは、なほくしきものから今め  
きなつかしきは人柄なるべし。君はいとく  
したるけはひして、疊算どかいふ事なる

夜毎々々に通ひ來る、梶原源太景  
季、心をつくせし身のまはり、大  
盡小袖長羽織、はうろく頭巾紫の、  
色にひかるゝ揚屋町、千年が奥を  
窺へば、れれを待つのか疊算、丁  
度能い首尾幸ひと、すつと通れば

六帖  
いづさて  
ざらむ信  
濃なる浅  
煙問の山  
も煙たつこ

万葉七  
こにしゆ  
きもりの  
あまの肩  
のまよび  
さり誰れ  
和名抄  
布(万與  
欲

を、我れを待つにこうと、先づ心れごりせ  
られて入り來れば、女「淺間の山は煙り立  
つとも」と口ずさみつゝ、ほかげにうちう  
むけるを、「あなむづかし、かう來たんなる  
を、なでふ心ゆかぬにか、くねくしうも  
てなし給ふよ。こよひのまらうどの后がね  
に定り給へるところ聞きしか。さばれ、こ  
よなう思ひわがり給へるよ。麻衣の肩のま  
よひは、とり見んともればさじかし。」とさ  
がなげにいひて、歸らむとするを、せめて  
及びて、「けふの席に物することは、固より

梅が枝は、火燧にどんと身をうむ  
け、煙くらべん淺間山と、うらさ  
ぬ顔でふくさせる。「是れ歌どころ  
じやない、來たわいの。何か機嫌  
に入らぬやら、めつきりと、もたせ  
ぶり、大名客の襟につき、御勿體で  
ゑすか。我れらが様な浪人、微た  
襟には付かれまい。」とすんぞ立つ  
を、「待たしやんせ。座敷ばかりを  
勤むる筈で、けふ爰へ呼ばれたは、  
文で知らせて合點じやないかへ。



壞也  
實之集  
さくらち  
り卯花も  
まだ咲ぬ  
しに心さ  
夏もはし  
なれし春

せうろこして聞ぬ参らせつ。知らぬ顔なる  
はいかにや。今はたい春夏もなき志を、  
かゝる身の慰めにはし侍るを、世の人の好  
きたわめたらむやうに、あだくしき筋に  
いひなし給ふは、中々浅き方になむ。いか  
に思ひたがへて、かうひがくしきことを  
も述べやらせ給ふ。契りろめし比はひより、  
こづことしと敷ふれば、憂きを忍べる年ど  
ろのうれたさなき、ねぼろげの事には侍ら  
ず。聞ぬ参らせんこともこゝら侍り。先づ  
なだらかに休らひ給ひてよ」と、涙を一目う

けてゑんじたる様、あい愛ぎやう深し。さ  
るはくたくしき事多かれと書かず。  
男も心折れて、「な歎い給ひろ。元よりの志  
は、疑ふべきにわらず。まづ告げ参らすべ  
き事あり。鎌倉殿の御弟君、院の仰せごと  
蒙らせ給ひて、うての使に一の谷に軍立し  
給はんとす。わが父はらからも御供に候ふ  
べきにて、我れも共に供奉し参らすべき事、  
かねて思ひ設けし事なれば、こゝらのつは  
ものゝ中に這ひまぎれて、思ひ出せんこと、  
かゝる時過ぐすべからず。さるは今夜寅の

色も戀もうちこして、心底づくの  
二人が中、口舌どころじやん御座  
んすまい。ね前と一たいかう成つ  
たは、並大抵の事かいな。わしも  
云ふ事たんどある、遅う來ながら  
其のいふかり、にくい男」と目に  
もろき、涙が戀のならばしなる。

「もうよい泣きやんな。疑ひ晴れ  
た。扱ろなたに云ふ事あり。今夜七  
つの出汐に、父を始め弟の平次景  
高、一の谷へ出陣、某も能き時節、  
軍勢にまぎれ下るにつけ、ろなた  
に預けた産衣の鎧、うけ取りに來  
たわいの。」と聞くにはつと當惑  
の、色目見てとる景季、「いやく  
氣づかひしやるな。長う別れる事







業集三  
のふの  
川木に  
さよふ  
のゆくへ

男はたゞあきれて、「ろはゆゑ由ころあら  
め。いかにやいかに。」とせむれば、「しか世  
なれ給はぬころ、所せう生ひ立ち給へるや  
ごどなき人のならひなれ。かうじかうぶら  
せ給ひてより、かくてねはする事のせんす  
べなく、せめてはふれ奉らじの爲に、此の  
神崎の君に身をかへ、とぞまかうさまうし  
ろみ奉りぬれど、かくある初めより、君を  
まらうどのさまに扱ひて侍れば、さる設け  
に、こゝらのこがね、費はつぐのへるも、  
何ばかりどか覺す。たどひ世に時めき、勢

ひ、まして勤めの身なれば、金の  
生る木はあるまいし、はなる土は  
持つまいし、れ主の勘當ゆりる迄  
ど、いつもの揚屋に呑みこませ、  
積りくし揚代金、三百兩の金の  
代りに、其の鎧はやつたわいな。」  
「扱は其の金がなければ、鎧は源太  
が手に入らぬか。ハアはつ」とば  
かりに當惑し、しばし詞もなかり  
しが、「もと此の鎧は頼朝卿に拜  
領、家にも身にも代へざるを、し

万葉集十  
八のふらぎ  
すのよ榮  
えむさあ  
づまなる  
みちのこ  
やまにこ  
がれ花咲  
くが九  
妹がため  
我玉ひる  
ふ沖べな  
る白玉つ  
て白波

ひある人の子なりとも、たからといふ物は  
盡くる限りあり。まいてねろかなる女の身  
にて、こがね花咲く山はらうせす。沖べな  
る白玉、いかで拾ひ得む。御かうじだにゆ  
りなばと思ひはかりて、何某のあるじに語  
らひて、三百兩のこがねのしろに、かの御  
鎧をなむをぎのり置きつる」といふ。「さら  
ば其のこがねなくば、産衣は贖ひ難しや。  
こはいかにせまし。」と胸つぶれて、しばし  
物もいはれざりしが、やゝためらひて、「ろ  
も此の鎧は、鎌倉殿の賜物にて、よろづの

なしたり残念や。今は悔いてかへ  
らす」と、胸押しひろげ刀を取れ  
ば、梅が枝あわて押しとめ、「こ  
りやまあどううろたへてじや、死  
ないでも大事な。」「いや、今  
夜の出陣をはづれ、一生埋れ木と  
なり、のたれ死せんより、只今切  
腹、ろこ放せ。」「サア、其の鎧  
さへ手に入れば、れ前の望みは叶  
ふでないか。して其の金は、」どう  
して調へると、御不審もたう、



寶タカラにくらぶべきにあらす。家にも命にもかへ難きものなるを、くちをしうも失ひつるよ。ろよや今は悔ゆともかひなし」とて、むね押しひろげ、刀とりて死なむとするを、とくだきといめて、「こはなぞ。うつし心正もなうねはするかな。」とわななく。「いな、こたびのいくさにえくれなば、生けるかひなし。埋れ木と朽ちはてんより、心清く死なんころまさらめ」と、しほ涙たれつゝいふ。「彼の御鎧あがなひ得て奉りてん。な歎き給ひろ。女の身にいかにすらむと、いふかり

ろこがれ前と談合づく、奥の客に身を任せ、たらしなば、二百兩や三百兩の金は自由、「扱はれれ故身をけがすか。」「夫の難儀にや代へられぬ。」「不便の者の心やな。假假令死んでも忘れぬ。」と涙ぐめば、「ア、女房に何の禮、たまへが爰にござつては、客をたらずに心が置かれる。」「ヲ、尤々、後にこうぐや。首尾能う、じやが、氣をもんで持病ツカヘの瘡、借錢のかはりに、瘡

給ひなむ。こは御心にだに免させ給は、こよひのまらうごに添ひふして、さまざま拵へなしなば、さばかりのこ金がね、易く得侍らむ。さはいへど、年比誓ひし操、いたづらになりなん事、かへすがへすくちをしところ。」「とて、かきくごき泣く。」「あはれの人の心や。我が命たゆとも、さる志忘るべきかは。」「とても又泣きぬ。」「ゆめさることなのたまひろ。彼のまらうごをこしらへんには、君のかくてればしまさば、心の鬼に思ひたがふる事もや。とく歸らせ給ひね。」「

れこしてたもんな。」と別れてころは歸りけれ。あと見送つて梅が枝は、暫し涙にくれけるが、



とすゝむれば、「さかし。長ぬせん、なかく  
にすまじからむ。暫し過ぐしてまゐるこむ。  
よく拵へ給ひてよ。必ずむねを痛め給ひて、  
れひめもつぐのはず、やまうをさへ引き出  
だし給ふな。」なぞいふくかへり見がちに  
出でてゆくうしろで、見送るさへ例ならぬ  
袖の露けさなり。

「必ず心いられして、いたうな惱み給ひろ。  
まことは、たばかりごととしてなぞ聞ぬしは、  
あがいつはりになむ。あろのいたづらに身  
をなし給はむ事のかなしく、しばしのどめ

「必ず氣づかひなさるゝなエ、わ  
たしが心當りのあるというたは、  
みんなうろ。れ前の命が、助けた  
いはつかりじやわいな。何のよし

んまでのろらごとにならなる。元よりゆか  
りなきまらうと、いかで疎かる人に、さる事  
やはすべき。さばれ、こよひの程にきせなが  
も得がたく、君の望みもかなはずは、死に  
給はんこところくちをしけれ。あはれいか  
にせまし」と、とどまかうざまに思ひめぐ  
らして、はし近うながめ入りてをるに、一  
間なる方に聲よくうたふをきけば、糸によ  
る調べも、つきなからず。

とをあまり 六つてふ年に  
たまづさを 手にとりすゑて

みもない奥の客が、三百兩の金く  
れうろ。今宵中に調べねば、鑑も  
戻らず、源太様の望みも叶はず、  
金ならたつた三百兩、金がほし  
いな。」

二八十六で文付けられて、二九  
の十八でつひろの心、四五の廿  
なら一期に一度、わしや帯どか  
ぬ。

「エ、なんじやの、人の心も知らず、  
面白うに唱ひくさる。あの歌を



とをあまり 入つてふ年に  
 ろのひとに かへさへ申し  
 はたとせと 年をしふれど  
 したひも、 猶どきやらず  
 戀ひつゝをる

と謠ふめり。こはなど、思ひ亂るゝ人の心  
 をも知らで、思ふさまにも謠ひなすかな。  
 彼の唱歌にいへらむやうに、あうに馴れ參  
 らせ、御館をしがきて後、かう遊びとさへ  
 はふれにたれど、さすがこと人には下紐解  
 かず。一日なりとも、睦まじきめをとどな

聞くにつけても、源太様になれろ  
 め、館を立ち退き、君傾城に成り  
 さがつても、一度客に帯どかず、  
 一日なりと夫婦にならうと、思ひ  
 思はれた女房をふり捨て、今度の  
 軍に譽れを取り、勘當が免された  
 いと思し召す、男の心はふんな物  
 じや。何かに付けて女子ほど、思ひ  
 切りのない物はない。男ゆゑなら  
 勤めするもいとほねど、まだどの  
 様な悲しい目を見ようも知れぬ、

りて、世にあらましなど、さる方にのみう  
 ちたのみしを、ねばしもかけず、こたびの  
 軍に譽れ得て、かうじゆりなんどのみ、思  
 ほしかけつる、あはれこよなきますらをだ  
 ましひずかし。とにかくに女といふものこ  
 ろ、思ふくさはひ絶えざるものなれ。あ  
 が君のためかゝる筋にたゆたふなど、いと  
 ふべうもあらねど、ありくゝてなほ末の世  
 に、いかならむ悲しかるめをや見まし。うれ  
 も彼れも皆すぐせなめり。とまれかくまれ  
 こがねころほしけれ」と、歎かれて立てる

うれも金ゆゑ、何をいふても三百  
 兩の、金がほしい。  
 わしや帯どかぬ甘なら、四五の  
 甘なら一期に一度、わしや帯ど  
 かぬ、かへらね昔戀ひしのぶ。



に、彼處には又今めかしき聲して、ソノサキヲねうよ  
りて花やぎうたふ。

わがどしは はたちになりぬ

然はあれど 命のかぎり

わがせこが ゆひてし紐を

どかめやは わかれし人は

ゆくみづの 返らぬむかし

戀ひやしのばむ

うちろへぬる聲もいとけちトモえんなり。

女思ひうんじて、忍びよりてまらうどを殺  
し、ふどころなる物盗みてんや、とさへ思

「ほんにうれよ。あの客殺して身  
請の金盗まう。イヤ〜〜、も

ひ起しつれど、さるひがわざし出づとも、  
中々いたづらになりなば、なき親の仇も討  
たれじ。さもあれいかにせまし、此の日の本  
の國の佛も神も、かくにはかななるねぎ事は  
うけひき給はじよ。いでや夫戀ふ女の石と  
なれるためしもぞある。身の賤しきはさる  
事ながら、こゝろれきては誰れにかは劣ら  
む。身はいはほどもなさはなしてむ」とて、  
つい立ちて、すのこなる石の鉢に、たゞへ  
し水をむすびて、手あらひ口ろゝぎて、人  
や知らむとうちひろみて、あなたなる方に

し仕損じ殺されては、と〜さんの  
敵も討たれず。ア、どうしやうな。  
もはや日本國に梅が枝が、祈る神  
も佛もないか。ハア〜、オ、ろ  
れよ、夫ゆゑには石と成つたる女  
もある。我れは賤しき流れの身な  
れど、一念は誰れに劣らむ、岩は  
どなれる手水鉢、水むすび上げ口  
すゝぎ、伏拜みく、人に知らせ  
じ聞かせじと、ひしやくれたつ取り



向ひて、しばしをがみ入りて、ひさく取り  
上げたるさま、何事すらむ、ことさらびた  
り。

「かねて世の人の云ひ傳ふる、無間の鐘をつ  
く時は、とみ心のまゝなりと聞く。うは遠  
つあふみなるさやの中山といへる所の御寺  
にありとか。道は遙かに隔たりぬれど、わ  
が斯く一筋に思ひ入りたる心もて、此の鉢  
を彼の鐘になすらへ、つきてしるしを見す  
べきなり。さもあらばあれ。これを無間の  
鐘となし、思ふ事かなは、生ける限りは

「傳へ聞く無間の鐘をつけば、有  
徳自在心のまゝ、是れよりさよの  
中山へ、遙の道は隔たれど、思ひ  
つめたる我が念力、此の手水鉢を  
鐘となすらへ、石にもせよかねに  
もせよ。心さす所は無間の鐘、こ  
の世は蛭にせめられ、未來永々、  
無間墮獄の業をうく共、だんない

蛭といふ蟲にせめられ、來む世は無間に墮  
獄すとも厭はじ。海川にすたれしのがね白  
銀、たいこもどにかい寄せ給へ。なも觀  
音ばさちと、ひたひに手押しすり念じをり。  
かほ色も赤らかに、紅梅のにはひ添ひ、髪も  
ふどり空さまにたてる心ちせられて、ひさ  
く持てる手さへわなゝさふるふを、思ひね  
んじて、「いで打たむ」と振り上ぐるほど、  
誰れにかあらむ、たかどのゝさうじひとま  
ばかりれしあけて、「こゝにころ」と云ひざ  
ま、こゝらののがね投げ出だすものか。は

く、大事な。海川にすたれる  
金、一つ所へ寄せたまへ。無間の  
鐘」と觀念す。面色忽ち紅梅の、  
花はちりぐゝ心も髪も、逆立ちあ  
がり、ひしやく持つ手も身もふる  
はれ、既に打たんと振り上ぐる、  
二階の障子の内よりも、其の金爰  
にと三百兩、ばらりぐゝと投げ出  
だす。深山れろしに山吹の、花ふ  
き散らす如ぐにて、爰に三兩かし  
こに五兩、是れは夢かうつゝかや。



げしき深山れろしに、山吹の花こき散らす  
ごと散りばひねつ。こは夢にや、さはうつ  
つにころ。ろもいづこの御佛にか、知らせ  
給はぬ人の、かく餘るばかりうつくしみ給  
へる、來ん世の末も忘れ侍らじと、ろいろ  
心もうせて、且は恐ろしきこゝちすれど、

こゝ彼處搜り索めて、三ひら五ひら拾ひ集  
む、嬉しさいふべうもあらず。包みもつべ  
き物もあらねば、袖ひきやりてつゝむにも、  
猶あまらざる喜び涙は、ともにつきせず。  
とく御鑑あがなひてんと、ひたひにさしげ

どなたか知らぬが、此の御恩、死  
んでも忘れぬ〜と、嬉しいやら  
こわいやら、拾ひ集むる心もろろ  
ろ、袖ひきちぎり三百兩、つゝむ  
に餘る悦び涙、鑑がはりの此の金  
と、押しいたしきれし戴き、いさ  
みいさんで走り行く。

て、  
さうおちうおちう、走り行さけり  
ぞ。



## おくがき

都のでぶりの辭句の出處を考へて、原書の裔頭に朱筆を入れて見たのは、去る三十三年の歳暮休みの折からであつた。然るに忽ち一月に入り、公私の用務の忙かしくなつたについて、稿本は其のまゝ本箱の底に入れ置いたところ、今年の夏ごろ、帝國文學の材料を何がな送れど、達つての頼みに餘儀なく、此の舊稿の片端を、同誌の紙面ふさげに載せた所が、同じ事なら全篇まどめて、單行本にせよと、勸める人が多いので、つひ其の氣になつて上版する事にした。

私は數年前から、中古の草子日記類や三鏡軍記などの、註釋の少ないものを始め、近世にもわたつて、近松等の院本や、也有の俳文、餘齋綾足の系の小説文などにも、考證めいた註を加へて見たいと、身にればぬ野心を起し、ポツ／＼と爲かけて見たものゝ、近年段々にそれらの中で、詳解評釋などといふ書も出來たから、今は自分の仕事は中止したが、此の書も實は其の中の一つである。粗糲至極な舊稿を、今更世上に出すも恥ぢ入る次第だが、かうして置いたら、古人の骨折も後に傳はり、又初心の人には幾らか参考にもならうと思つてである。

明治四十二年十一月

三樹園主人



明治四十二年十二月廿五日印刷  
明治四十二年一月八日發行

◀ 著作權所有 ▶

發行所

大倉書店

電話本局四一四番  
振替口座東京三三八番

東京市日本橋區通一丁目十九番地

印刷所

大倉印刷工場

東京市京橋區新榮町五丁目七番地

發行者兼  
印刷者

大倉保五郎

東京市日本橋區通一丁目十九番地

著者

關根正直

(都のてぶり奥付)

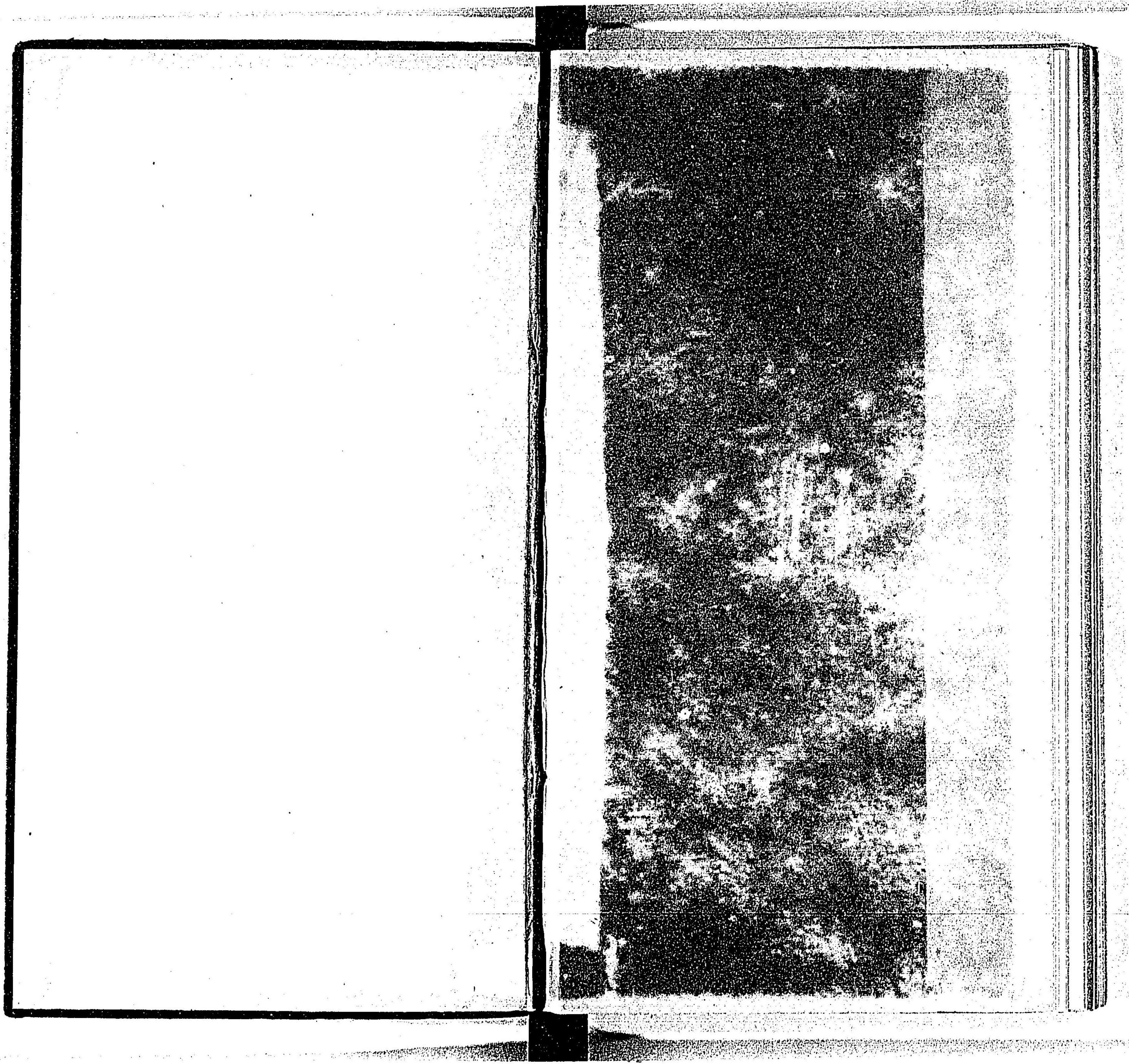




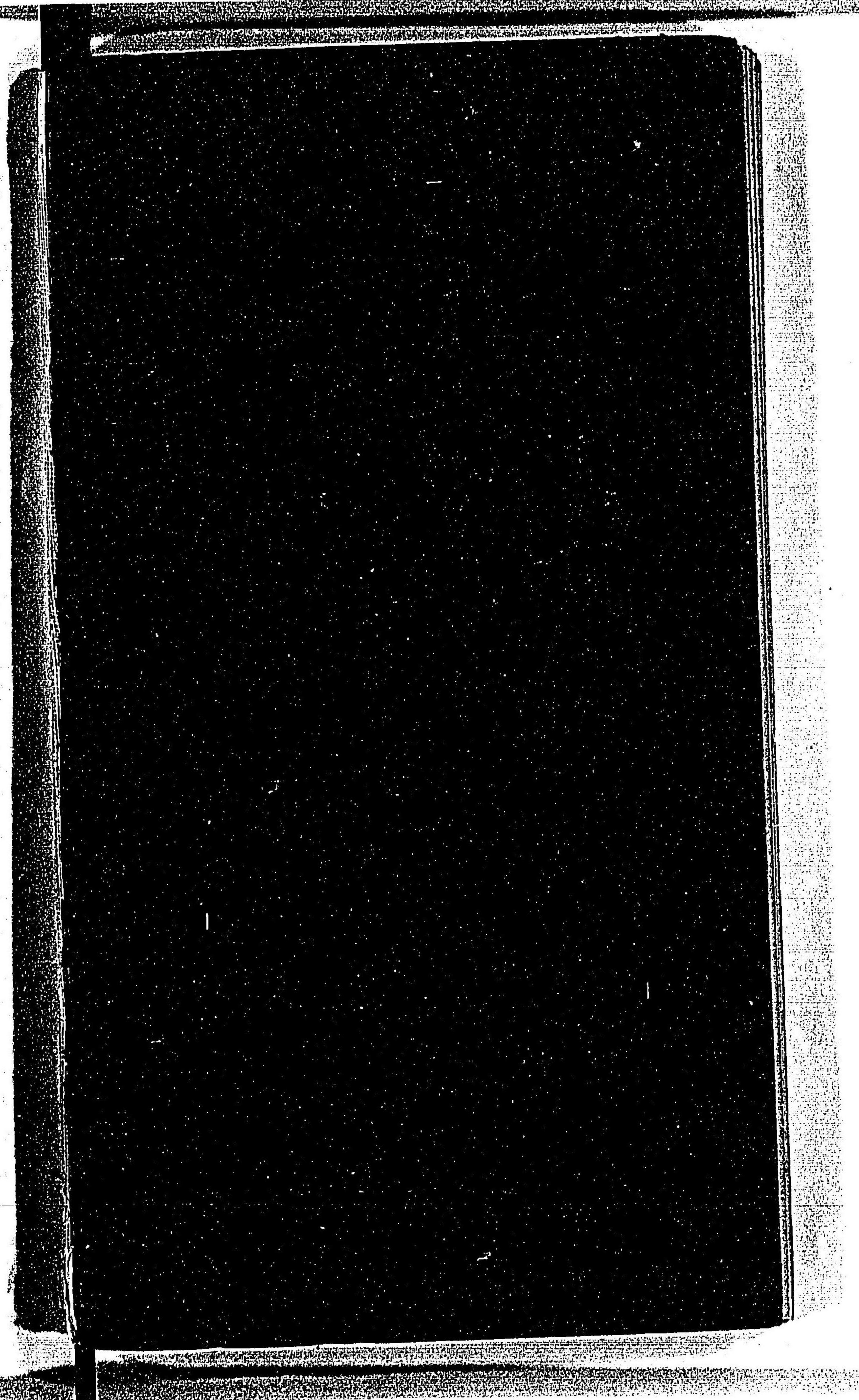
大倉書店發行略目

|                |                   |                 |                 |                   |                    |                 |                 |                |                  |                 |
|----------------|-------------------|-----------------|-----------------|-------------------|--------------------|-----------------|-----------------|----------------|------------------|-----------------|
| 東京遊行記          | 草露集               | 青年時代            | 日本學生寶鑑          | 濛虛集               | 我輩は猫である            | 新體書翰            | 新體文範            | 文章入門           | 筆のゆきかひ           | 文筆のあや           |
| 全一冊            | 全一冊               | 全一冊             | 全一冊             | 全一冊               | 全三冊                | 全一冊             | 全一冊             | 全一冊            | 全二冊              | 全一冊             |
| 正價金壹圓<br>郵稅八錢  | 正價金七十錢<br>郵稅八錢    | 正價金七十錢<br>郵稅八錢  | 正價金一圓廿錢<br>郵稅八錢 | 正價金一圓四十錢<br>郵稅十二錢 | 正價金二圓七十五錢<br>郵稅十六錢 | 正價金六十錢<br>郵稅八錢  | 正價金六十五錢<br>郵稅八錢 | 正價金六十錢<br>郵稅八錢 | 正價金九十錢<br>郵稅八錢   | 正價金四十五錢<br>郵稅六錢 |
| 歌常夏            | 通結婚新說             | 生理學上婦人の本分       | 獨逸戯曲物語          | 英文五重塔             | 英文我輩ハ猫デアル          | 英文落葉籠           | 家庭口演十種          | 女子ふとこる鏡        | 日本ことばの泉          | 國語新辭典           |
| 全一冊            | 全一冊               | 全一冊             | 全一冊             | 全一冊               | 全二冊                | 全一冊             | 全一冊             | 全一冊            | 全二冊              | 全一冊             |
| 正價金九十錢<br>郵稅六錢 | 正價金二圓二十錢<br>郵稅十二錢 | 正價金五十五錢<br>郵稅六錢 | 正價金六十錢<br>郵稅六錢  | 正價金七十錢<br>郵稅六錢    | 正價金九十五錢<br>郵稅八錢    | 正價金八十五錢<br>郵稅八錢 | 正價金八十五錢<br>郵稅八錢 | 正價金五十錢<br>郵稅六錢 | 正價金十二圓<br>郵稅五十二錢 | 正價金一圓十錢<br>郵稅八錢 |











914.5  
I619m2  
S

都  
附  
換  
り  
證  
物  
語

六  
食  
書  
店

095956-000-4

914.5-I619m2s

都のてぶり考証

石川 雅望/著

M43

DBR-0223

